東亜同文書院卒業生の軌跡
――東亜同文書院卒業生へのアンケート調査から――

藤田佳久

一、はじめに――書院史と関連して――

本号は一九九四年末から一九九五年にかけて筆者が行った東亜同文書院および東亜同文書院大学、東亜同文書院大学専門部の卒業生の方々へのアンケートの回答を軸に、同卒業生の軌跡の一端をその中から浮かび上った思考や行動からまとめたものである。

すでにくりかえすまでもないが、東亜同文書院は、一九〇一年に上海に開学したビジネススクールとしての専門学校である。経営母体は東亜同文会で、日清戦争後の同会による日中間の本格的な教育文化事業のその中心的事業の一つとしてこの東亜同文書院が開校された。もちろん、それは突然の開校ではなく、その前史にみられたいくつかの試行の上に設けられたものである。

その前史は荒尾精による明治十年代末に行なわれた上海や漢口での清国の地域情報の収集活動があり、[1] さらにそれを編集刊行した『清国通商綜覧』[2] の日清貿易研究所の存在があった。編集者は荒尾精と親しい根津一（はじめ）で、のちに東亜同文書院の初代院長に就任し、書院（以下、書院）の経営を実践することになる。『清国通商綜覧』は、清国の商業地理的内容をもつ貿易実務書への原型に近く、清国の実態を初めて日本人に知らしめ、好評を博した。

それを刊行した日清貿易研究所は、いわばその後の東亜同文書院のモデル校的存在であり、一八九〇年に同じく上海に開設された貿易実務者養成の学校であった。しかし、それはのちに日清戦争が始まり、日本へ引き上げざるをえなかった。日清戦争後、新たな日中間の文化交流をめざす東亜同文会が教育事業として貿易実務者養成の学校を構想した時、この会の運営の中心を荒尾から清国滞在時代に薫陶を受けたメンバーや、日清貿易研究所の出身者が中心に担い、近衛篤麿が理事長となった。したがって、その構想の中で浮かび上った東亜同文書院は、先行した日清貿易研

究所がモデルになり、同会が中国各地で展開することになるさまざまな教育事業の中心校として上海に設けられたのである。日清戦争後、さまざまな政治団体が中国をめざして結成され、学校なども設立されたりしたが、東亜同文会と東亜同文書院はそれらの団体や学校とは明らかに異なっており、とくに後者は日清戦争前に日清間の貿易を日本人の手で担おうとするための人材育成の目標が明確に継承されたといってよい。

したがって、東亜同文書院は日清間における有能な貿易実務者養成の専門学校として設立されたのであり、戦後になって戦時中の書院生の通訳従軍や外地での設置などを理由にスパイ学校ではなかったかとの流言は直接的には当らない。

実際、中国語（北京語）を徹底してトレーニングし、のちに東京商大の教授になる根岸佶は開学間もない時期に、上海や漢口などで清国の商取引慣習とシステムを学生とともに詳細に調査し、学生のレポートをもとに『支那経済全書』[1]全一二巻として刊行している。そこには開設当初の書院のめざす方向がきわめて明確に打ち出されていたといえる。それはのちに「大旅行」へつながる背景になるのである。

院長に就任した根津は、資金不足を県給費生制度の導入によって軽減し、しかも有能な学生を募集することにも成功した。こうして各県二名ずつの学生募集は、大陸への夢と県の学生への給費制度によって、各県での入試の競争を次第に激化させた。根津は同時に入学生を上海ではなく東京へ集め、皇居や伊勢神宮、京都の神社などを順に巡り、日本文化や日本精神を入学生に感じさせる仕組みも工夫した。上海は当時国際都市であり、それだけに日本人としての自覚を促し、中国で浮草にならないための処方箋を生み出したといえる。それらに根津院長の才覚がうかがえ、のちに書院生や書院関係者にとってのカリスマ的存在になる片鱗をうかがうことができる。

入学した学生数は各県一～二名程度の給費生のため当初六〇～七〇名程度。のちに私費生も認められ、さらに満鉄や新聞社、外務省などからの派遣生も受け入れるようになり、一学年一〇〇名を越す年もあるが、それでも専門学校（一九二一年、大正一〇年より修業年限四年の専門学校になる）の書院時代は一〇〇名を越えるのは七年分しかなく、全体としては毎年六〇～一〇〇名程度が卒業した。それが大学へ昇格すると、一五〇名前後とふえ、あわせて一九四三年（昭和一八年）に併設された大学専門部は一二〇～一六〇名の入学生があり、一九四三年（昭和一八年）以降三年間は三〇〇人をこえる入学者があった。しかし、この時期は学徒出陣や繰上げ卒業があり、その後の終戦の閉学にかけて教育環境は急速に悪化している。一九四五年（昭和二〇年）の日本からの入学生は、中国へ渡れず、富山の分校で過した。

第一表は書院、書院大学、同専門部の卒業生数、入学者数を示したものである。書院時代は約三、二〇〇人が巣立ち、書院大学・同専門部は約一、四〇〇人が入学した。あわせて約四、七〇〇人が書院、書院大学・同専門部に入学したことになる。

学科は商経科が中心で、当初はそれに政治科、途中で農

第一表　東亜同文書院卒業者数（自第1期至第39期）

期別	年次	政治科	商務科	農工科一部	農工科二部	中華部	合計
1	明治37年（一九〇四）	六	五四				六〇
2	38	二	六四				七六
3	39	三	五九				七二
4	40	二	四八				六〇
5	41	一	七六				八七
6	42	六	七九				八五
7	43	六	七一				七七
8	44	八	五四				六一
9	45	九	五五				六四
10	大正2年（一九一三）	五	七一				七六
11		六	六九				七五
12	4	四	六九				七三
13	5	二	七二				七四
14	6	一	七七	一	四		八三
15	7	二	六〇	七	三		七二
16	8	六	七三	七	一		九七
17	9	四	六八	五	一〇		八七
18	10	三	七五				八八
19	11		一〇八		二		一一〇
20	12		一三五		五		一三五
21	14		七三				七五
22	15		一〇九			五	一一四
23	昭和2年（一九二七）		九〇				一〇〇
24	3		八〇			〇	九〇
25	4		七五			五	八〇
26	5		八七			四	九一
27	6		九一			六	九七
28	7		七四			二	七六

期別	年次	政治科	商務科	農工科一部	農工科二部	中華部	合計
29	8		八七				七九
30	9		九一				九四
31	10		六四				六四
32	11		六一				六一
33	12		七〇				七〇
34	13		八八				八八
35	14		一〇三				一〇三
36	15		九一				九一
37	16		一〇三				一〇三
38	17		一〇六				一〇六
39			二四				二四
総計		一六	二九九五	二五	三五	四八	三二一九

期別	年次	予科・学部入学・卒業者数			専門部入学者数	
		18・9卒業者数（大学1期）	19・9 〃（2）	20・9 〃（3）		
40	昭和14	一一七	一六六	一五〇		
41	15					
42	16					
43	17	一七二	一九二	一六二		
44	18	一九二	19・10 〃（5）	18・10学部入学者数（4）		
45	19	一〇〇	19・4予科入学者数（予科6期）（7）	20・4 〃（3）	一六二（専門部1期）（2）	一二四
46	20	一七七				
計		四二二 六四一	（卒業者数）（入学者数）		四一八	（入学者数）

注　本表は、（1）四十周年記念誌所載の卒業生数、（2）旧大学史所載の学籍簿による各期の名簿、（3）旧大学史本文記載の卒業生数を、他資料に照らして比較検討し、おおむね（2）に準拠して作製した。見出する数字をも参照して比較検討し、おおむね（2）に準拠して作製した。三者間に数字の相違する個処があるが、これは追加試験卒業者などの取り扱いの相違に因るものと推測される。なお、本編本文の卒業生数は（3）に拠っているので、本表と相違する年次があるが、その差は、総計において十名程度である。（『東亜同文書院大学史』（一九八二）より引用）

東亜同文書院大学予科・学部・専門部卒業・入学者表

（『東亜同文書院大学史』より）

工科が短期間ながら設けられた。また中華学生部も設けられたが、日中戦争により中国人学生が減少し、自然消滅となった。なお、大学昇格時には二年間の予科が設けられ、商科大学として専門課程は商業に関する理論と応用が中心分野となった。

しかし、大学昇格後の書院大学は日中戦争下で苦難の道を歩むことになる。

すでにそれより前、一九三七年（昭和一二年）には第二次上海事変により、一九一五年（大正四年）に完成した円熟期を迎えていた徐家滙の新キャンパスの校舎が中国兵の放火で全焼し、一切の図書や資料、展示収集品等を失ない、やむなく長崎女子師範跡校舎へ移転、そのあと上海の書院に隣接していた南洋大学（現在の交通大学）を借用、再開している。財界や居留民団の援助で図書の手当がなされ、以降終戦まで借用、終戦にともない校舎は返還、閉学となった。四五年間、二〇世紀前半期に及ぶ上海での歴史に幕を閉じることになった。

ところで、二〇世紀前半期の中国は激動の時代であった。辛亥革命によって長年にわたる清朝が倒れ、一時袁世凱による政権乗っ取り事件があったが、何とか共和制へ移行、中華民国が誕生した。しかし、中央集権体制の崩壊は地方に軍閥が割拠して内戦をもたらし、のちに蔣介石が統一するまでは軍閥と土匪による政治的混乱期が続いた。政権の弱体化で列強の干渉も強まり、そんな中、日本が押しつけた二一ヵ条要求（一九一九年）は、学生達を中心にした五・四運動を生み、中国に本格的なナショナリズムの芽を生じさせた。それは一九二五年の五・三〇事件でさらに点火され、全国へ排外・排日運動が拡大した。そのような波はやがて書院の中へも及び、日本軍部への批判行動を起した例もみられた。

このような社会不安と混乱の中、一九〇七年から始った書院生の「大旅行」が冒険的旅行のふんいきをもちつつ毎年実施された。その契機は開学時から根岸佶によって指導された商慣習の現地調査が多面的な中国をもっと知りたいとする書院生の気持に継承され、それが直接的きっかけを与えたのは、二期生五人による辛苦の西域調査旅行の成功[5]によるものであった。詳細は省くが、これによって外務省とのつながりも出来、毎年五、六月から約三ヵ月間の中国「大旅行」が最終学年学生の最大行事として定着化した。当時の交通状況を反映して、旅行のほとんどは徒歩中心の「大旅行」で、日本人がほとんど知らない農山村地帯を奥深くまで入り込んだ。中国を越え、遠く東南アジアまでそのコースは広がり、会計七〇〇コースにまで及んだ[6]。

この「大旅行」は、いくつかの目標があった。一つは上海だけでは理解できない中国の実像を現地で確認、経験し、二つは各人が卒論としての調査研究を行なったこと、また途中から日誌も提出が義務づけられ、旅行中の中国各地の実情が記録されたこと、また、三つは入学以来、各寮の部屋単位で上級生から「書院カラス」と称されたほどの中国語の発音と、中国人教師も交じえた中国語授業の特訓の成果を現場で生かし、応用することであった。また数人単位の各班の学生は軍閥抗争や土匪出没の中で苦楽を共にし、強い連帯心を生み出すことにもなった。

前述のように、この時代の中国は混乱期であり、この時

代の中国を集中的かつ全域的に活写した記録は他に例がない。それだけに、この「大旅行」の記録は二〇世紀前半の中国の文字通り空白の記録を埋める貴重な存在になる筈である。

なお、この「大旅行」は半世紀に渡り、七〇〇コースにも及ぶ継続的な地域調査であり、フィールドワークを重視する筆者の専攻する地理学の分野においても世界に例をみない突出した世界最大級の調査だと言ってよい。これらの成果は『支那省別全誌』や『新修支那省別全誌』など地誌として刊行されたが、戦後の日本ではほとんど評価されていない。戦後流布された書院をめぐる性格づけや、戦時期作品への軽視がその背景にあるからであろう。しかし、今日の中国の急速な変化と底辺における伝統性は、今後これらの作品を評価させることになるのは間違いないだろう。

書院生達は卒業後も各分野で活躍した。とくにその多くが中国で職を求めている。中国で活躍したいという志をもって入学した多くの書院生にとっては当然であったかもしれない。多くは商社系、金融系だが、領事館などの官吏やジャーナリズムの世界にも広がっている。満州国が発足すると、中国本土から満州へ就業の場が移動するケースもみられた。新生満州国の官吏にも進出している。昭和十年代には日本内地の大学の中には、中国へ講座や研修の場を広げる例もみられるようになったが、中国や満州では書院に及ぶものはなかった。

それだけに、敗戦にともなう戦後、多くの書院卒業生はほとんど無一文で引揚げ、戦後の厳しい時代をもう一度生活設計し直さねばならなかった。そんな中で内地に縁のなかった卒業生は、相互に扶助しあい、同窓意識を強める形で再起しあった。中国との間の冷戦が続く中、中国との関係で活躍することはできなかったが、折からの高度経済成長期には外地での生活に慣れぬ日本人の先頭を切って外地へ赴き、日本経済を支え、また日本市場を拡大する上で貢献した。まさに日本経済の成長をそのフロンティアゾーンの拡大の中で支えた卒業生も多かった。

そんな中で、「幻の名門」という形容詞的用語が書院の上に冠せられ、書院の名が人々の記憶の中に継承された。しかし、同時に、折からの東西冷戦の中、イデオロギー的対立の中で書院の位置づけは植民地の先兵的評価もなされ、卒業生の人達は自由に自己を語れないふんいきもあった。

筆者が十数年前、「大旅行」に関心をもち、さらに書院に関心を持った時はまだそのようなふんいきの残る時代であった。そんな中で今は亡き九期生の斎藤文雄氏から始めた卒業生の人達へのインタビューをつづけてきた。その数はかなりにのぼり、筆者自身いくつかの人生を味わせていただくような経験をしてきた。インタビューは今も続いており、それらはいつかまとめて世に出したいと願っている。

しかし、卒業生の方々は高齢化がすすんでいる。日本の平均寿命の延びが筆者のインタビューの機会には幸運であったが、さまざまなむつかしい状況も同時に進行中である。

そこで、できるだけ多くの卒業生から体験や意見をうかがうため、一九九四年末から一九九五年にかけてアンケートを実施させていただき、全体の方々の軌跡を描くことを

考えた。正直に言えば、高齢化のすすむ中でインタビューが時間の流れに追いつかず、早目にこのような形で実施しなければ多くの方々の体験や意見が聞けなくなってしまうという焦りがあったことも事実である。そして何よりも書院の歴史を埋れさせることなく、光輝く歴史的存在として確認し、刻印しておきたいという願いがあったためである。

以下はそのアンケート結果にしたがってストーリーをすすめる。

なお、書院卒業生のアンケートによれば、書院の認知の上での確認は、戦前の受験雑誌「受験旬報」（旺文社）によるケースの多いことがわかった。そこで旺文社宮澤静也氏の御協力をいただいて、当時の「受験旬報」に紹介された書院の記事を本文の関係分野の中にコラム的に挿入させていただき、アンケート結果に連動する背景を多少とも裏付けられるように工夫した。「受験旬報」の記事は受験情報が中心ではあるが、同時にその中に書院の動向を示す内容もかなり含まれている。アンケート表が多く並ぶため、これらのコラムが生き生きとした当時の書院の表情を伝えてくれ、書院像を浮かび上らせてくれるであろうことを願った。

アンケートにご協力いただいた多くの書院の方々と、旺文社の宮澤静也氏には厚くお礼申し上げたい。

二、アンケートの方法

アンケートの内容については、それまですすめていた書院卒業生への聞き取りの経験をふまえて設定した。

その主な内容は、入学に関する事項、書院での学業や生活に関する事項、書院の施設や行事、教育に関する事項、「書院精神」や書院生気質に関する事項、卒業後の就業での中国とのかかわり方に関する事項、戦後の就業と中国とのかかわり方に関する事項、書院への見方に関する事項、書院での中国語教育に関する事項、現在の中国語とのかかわり方に関する事項、「大旅行」をめぐる準備からコース、現地での対応、作品、人生への影響にまでかかわる事項、卒業後の兵役とそれにともなう影響に関する事項、同窓の先輩と後輩に関する事項、人生の中での書院とのかかわりに関する事項、などで、きわめて多岐にわたる。全体の基本的質問項目は六〇を越え、その枝問を加えると九〇問に及ぶ。

そのさい、アンケートの質問内容は卒業年次によって少しずつ変え、全部で六種類に分けた。今回は特定の項目については一部の年次生が漏れているが、これはそのようなアンケートの内容の卒業年次による差のためである。ただし、ここではなるべく共通項目に関するアンケートの結果を示した。そのため、アンケート結果のすべてをここに示してはいない。一つは紙幅の関係もあるが、筆者の判断で全体の動きとは直接かかわらない部分は割愛したためであ

る。それらの一部は表には示さないが、本文中で記述によって表現したケースもある。

アンケートは一九九四年末にご健在である方々のすべてに発送した。その総数は一、四三八人。最も古い卒業生は一二期生のお二人であった。すでに一九期生までと二一期生は一〇人を切っていた。また二〇期代まではその数も少い。また外国人および外国在住の卒業生のすべてにも国際郵便で送付した。

その結果の回答回収数は第二表に示す。

書院卒業生の回収数は一四九で送付数の二六・七パーセント、また書院大学と同専門部の卒業生回収数は二三九で送付数の二七・二パーセントとほぼそれぞれ四分の一の比率を占めた。書院卒業生と書院大学、同専門部卒業生の間の回収率には大きな差はみられない。全体の回収数は三八八、回収率は二七・〇パーセントになる。この数字は一般的な郵送調査に比べるとやや多い程度である。

ただ、九〇問に及ぶ質問項目数を考慮すると、まずまずの回収比率ではないかと思われる。なお全員に筆者の執筆した「幻」ではない東亜同文書院と東亜同文書院大学」というタイトルの小論が掲載されている小冊子『東亜同文書院大学と愛知大学[8]』(第一号、六甲出版)をアンケート用紙とともに同封した。この冊子には書院卒業生の小林一夫氏(元NHK解説委員)、小崎昌業氏(元ルーマニア特命全権大使)、釜井卓三氏(元読売新聞社編集委員)の諸氏の書院を

第2表　期別アンケート送付数と回答数

期	送付数	回収数
12 (1912年入学)	2	0
13	0	0
14	0	0
15	1	0
16	5	1
17	2	1
18	2	0
19	8	1
20 (1920年入学)	10	2
21	3	0
22	10	1
23	17	1
24	20	2
25	15	2
26 (1926、昭和元年)	14	3
27	16	2
28	23	2
29	28	4
30 (1930年入学)	34	6
31	26	6
32 (1932、昭和7年)	29	5
33	26	4
34	48	15
35	48	13
36	51	34
37	58	16
38・39	63	28
小計 (回収比率)	559	149 (26.7%)
40 (1939年入学)	76	24
41	101	32
42	106	33
43	119	22
44 予	110	34
44 専・不明	99	19
45 予	61	19
45 専・不明	88	30
46 予	68	15
46 専	51	11
小計 (回収比率)	879	239 (27.2%)
合計 (回収比率)	1,438	388 (27.0%)

めぐる論考も掲載されており、回答に当り書院当時の学業や生活を卒業生が思い出されるチャンスにもなったのではないかと思われる。

いずれにせよ、回答していただいたアンケート用紙には、通り一遍の記述のケースもあったが、中には用紙の裏面、さらには用紙を付け足して気持を吐露される形で表現されたケースも多く、筆者の方が思いがけない迫力に圧倒されつづけるケースが多かった。

これはアンケートの設問のほとんどが記入方式で、選択肢による回答の設問はわずかにすぎなかったためである。

その結果、ぎっしり書き込まれた回答をどのように処理するかは新しい課題になったが、今回のアンケートの整理の過程では、表にまとめる方法をとったため、内容豊かな回答についてはキーワードに集約する形でまとめることにした。そのため、その整理には多くの時間と判断力を必要とした。

なお、回答の中で、さらに掘り下げた内容をもつ記述やそこからさらに発展した長文の記述については、それらの内容をさらに整理してその主旨が生かせるよう別編で対応したく考えている。

また今回は書院卒業生の時期別の対応や考えを素直に表現するため、紙幅の問題もあるが各回答の比率もあえて表示しなかった。全体の中での数字の大きさで意見や考え方の分布がわかるレベルに留めた。したがって、クロス集計などによる分析は行っていない。分析よりは、書院卒業生の期別、つまり時代の流れの中での意見や考え方の変化やバラエティを多くの方々に理解してもらうべく、なるべく生の形に近いレベルでまとめ、示すことに心がけたためである。そのため、本文中の解説もなるべく最小限に留めた。

以下、アンケート結果をつなぐ形で検討していくが、それらのアンケート結果は統計的には全体として十分に有効であるが、回答を寄せていただいた全体の約四分の一にあたる四〇〇人弱の方々の結果であること、このような内容のアンケートに対して積極的に対応していただいた方々の結果であることを付記しておきたい。また回答者は書院時代は一六期生の一人が最も古い卒業生であり、一〇期代はわずか三人、二〇期代は一九人で、多くは三〇期代の方々であること、など構成に偏りがあること、これらの点は、設問の内容に応じて期別の区分を考慮したことも付記しておく。

三、書院への志望をめぐって

書院の入学時が毎年の八月から内地の学校のように四月入学へと変更されたのは一九二一年（大正一〇年）に入学する二一期生以降のことである。それは同年から書院に対し「専門学校令」が適用され、在学期間もそれまでの三年間から四年間へと変更されたこととも関係している。これによって書院は内地の同格の学校と整合性をもち、外務省の所管となった。書院がこれによってさらに内容が充実することになり、書院時代の円熟期が始まることになる。一九一五年に完成した新キャンパスはそのような書院発展の舞台にもなった。

このような書院の存在を入学生達はどのような情報によって知ったのであろうか。

第三表は書院の情報源についての回答である。回答者の期別は七区分した。大きくは三九期までの書院時代と四〇期以降の書院大学時代に区分し、さらに書院時代は三三期までとそれ以降に区分、うち三四期は最終学年に校舎が焼けて急拠長崎の仮校舎へ移行した学年として、区分、三七期と三八期・三九期は書院の大学への昇格が噂されるようになった時期であり特別に区分、その結果、三五、三六期も区分された。四〇期は書院大学時代の第一期生であり、特別に区分、あと四六期は太平洋戦争の激化の中の進学もより厳しい状況下の学年で、結果的に日本内地で合格した学生は東支那海が危険なため上海へ渡れず、富山県呉羽の仮校舎でわずか半年間あまりの在籍で中断されることになったことで区分した。

同表によると、全期を通じて最も多いのは先輩からの情報、つまり進学希望者は当時の中学校や商業学校（今とは異なる旧制五年制）で、それぞれの学校の書院へ進学した先輩からの情報である。この時期、書院の卒業生は夏季休暇には内地へ帰ることが多く、そのさい母校に寄り、時に母校で講演会を開いて中国の実情と書院での学業や生活を伝えることが多かった。そんな中で大陸と書院に胸踊らせて先輩からの情報に耳を傾けた志願者が多かったに違いない。とりわけ、書院は内地ではなく、中国にあったことが、書院情報を内地の学校のように入手しにくい状況があった。それだけに先輩からの生情報は口コミとしての大きな有効性を発揮したことがうかがわれる。その両者をあわせると八六人が先輩からの生情報により書院を知ったとしており、このように進学希望者にとって先輩からの情報と先輩による講演が書院をより身近に感じさせたに違いない。

例えば、二三期の加藤廣夫氏は、長野県諏訪中学時代に同中学の先輩で書院に在籍していた坂口幸雄氏（二一期）が夏季休暇中に同中学を訪ね、生徒の前で講演した中国と書院の話を聞いて書院への進学を決意したという。坂口氏自身の態度も魅力的であったという。のちに「大旅行」の時、解散後に卒業して大連に就職していた坂口氏を訪ね、大変お世話になったという。中学時代の接点が先輩後輩として書院時代、さらに卒業後も続いた好例である。

このような口コミは教師や父兄、親戚などの親族からの情報の多いことにもあらわれている。とりわけ外地にあっ

第３表　東亜同文書院を知った情報源（複数回答）

内　容	期 17～33	34	35・36	37～39	40	41～45	46	合計
受験雑誌	3件	3	1	8	6	42	1	64
募集案内	4		1		2	16		23
県の公報			3	2	4			9
教師から	6	4	11	2	5	8	3	39
父母兄から	4		3	5	1	28	7	48
親戚から	3	1	5	1	1	10		21
友人、知人から	2	2	2	1		15		22
先輩から	11	3	7	8	1	34	3	67
先輩の講演	5	1	3	1	1	8		19
卒業生の活躍				1	1	1		3
有名でよく知っていた	2		2	1	2	8	2	17
日常的に知った			2			2		4
中国にいて知った				2		9	7	18
書院生を知って					2			2
満鉄派遣制度で			3	1	1			5
長崎仮校舎を知って						3		3
荒尾精を知って							1	1
小竹教授から						1		1
中国情報から						1		1
合　計	40	14	43	33	27	186	24	367

（1995年アンケートより作成）

〈コラム１〉

東亜同文書院

（一）恐らく変更はないであろう。

尚募集人員は凡そ百十名位、上海でも受験出来る様になった。入試問題は東京の東亜同文会から出題されるので本校の教授諸氏は全然関係なし。

（二）毎年十一月十日に靖亜神社の大祭が行われる。靖亜神社は日清貿易研究所（書院の前身）の設立者荒尾氏及び書院経営の功労者根津院長、近衛篤麿（文麿氏の父君）の三氏の外他界された書院卒業生諸氏の霊を祀る神社であり、社殿は昨年竣成された書院卒業生諸氏の寄金によるものである。（古賀俊亮寄）（今西照男君寄）

（一九三六（昭和十一）年上旬号「全国上級語学校動向一覧」（『受験旬報』より））

〈コラム２〉

東亜同文書院

【国語】問題数は二題であるが、出題様式は必ずしも一定していない。昨年は近世文と和歌であったのが、今年は近古文と現代文になっている。こうした変化ある出題から推すと、本校が諸君に課してテストしようとする点は、国文の全般的素養にあるといえよう。従って準備の着眼点もここになくてはならぬ。国文の全般と言えばあまりに広く聞えるが、専門的な研究ではなく、一通りの国文常識の程度でよいのだから、近古・近世文、現代文、副文等に亘って素養をつけておくべきであろう。因みに昨年の第一問は藤井高尚の文から、今年は方丈記から採られている。現代文は極めて新しい表現様式のもので、訳出表現に苦心を要するものであることを付け加えておく。

【漢文】国語に比して変化のない一貫した出題である。二題とも返点のあるもので、要求は送仮名と解釈である。内容は教訓類、史類かまたは、大部分が支那のものである。而して次に示したものによっても判る様に、出典は大体有名なものであるから、そうした種の書籍を中心に準備を進める方が効果的であろう。

唐宋八家文（昭十一）孟子（昭十一）愚思録（昭十一）後漢書（昭十二）

（一九三七（昭和十二）六月上旬号「全国上級学校国漢出題傾向大観」（『受験旬報』より））

〈コラム3〉

東亜同文書院

内容的には予測を許されないけれども、英和三題、和英二題で問題の長さなども例年のようであるから、まず本年度あたりの問題が斯んなものかと思えばよい。出題の方針には大きな変化はまずないと考えてよいであろう。論説、叙事、随筆と言った多種多様な内容のものが読みこなさせる力を養って置く事が望ましい。さりとて多読をすすめる訳では勿論ない。間口を広げず、少数の良書を精読すればよろしい。問題が平易でも、僅か一時間でまとめあげるのであるから相当頭を働かす必要がある。

和英は最も広い範囲の日用記事文であるが、決して無理な注文はしていない。リーダー巻三の英語が完全に書きこなせればよいのである。基本的な文法知識を整備することが何より大切である。中心となる参考書を英和、和英各一冊精説主義ですすめてゆき、語彙などは他の方面から養うよう意を用うるが賢いやり方である。

（九三八（昭十三）七月上旬号「全国上級学校英語出題傾向大観より」（「受験旬報」））

〈コラム4〉

東亜同文書院

一、改正される点なし。

二、本院は支那事変の為、昭和十二年十月十八日左記臨時校舎に於て開校せり。

長崎市桜馬場町七一（旧師範学校跡）

三、九三八（昭和十三）一月上旬号

（「学校当局より十三年度受験生へ」（「受験旬報」より））

〈コラム5〉

東亜同文書院

一、試問室は一室、試問官は六人程で、所要時間は普通三分位長い人で五分位である。

二、本校志望の理由を主に尋ねる。その他一般身上に関する事、他校受験の有無等を聞く。

三、口試は重視されている。態度人物をよくみられる故、真面目な態度と絶対的に正直であることが必要である

（一九三八（昭十三）六月上旬号（「受験旬報」））

〈コラム6〉

東亜同文書院

一、胸囲　胸隔拡張　脊柱　内臓（胸部、腹部、心臓）　口腔　歯牙　耳（聴力、疾患）　目（視力、疾患）

二、呼吸器病、花柳病、色盲（軽度は可）

三、自三月二十一日―至三月三十日（受験地毎に右期間内に行う）

四、体検部門も府県費生、公費生等は受験地によって相違し一定しない。

（一九三八（昭十三）七月中旬号（「受験旬報」））

た書院の情報は親にとっては目立つ存在であったろうし、次表にみられる県給費制度による授業料・学費の安さも当時の日本にあっては魅力的であった。

それに対して、受験雑誌による情報が第二位を占めるが、四〇期以降の書院大学時代に入ると受験雑誌情報が第一位を占める。受験雑誌の名は「受験旬報」で一九三二年（昭和七年）に旺文社から発刊されるようになった。毎月上旬、中旬、下旬の三回刊行される週刊誌タイプのきめ細かな高専や大学に関する受験情報誌で、のちに受験雑誌「蛍雪時代」へと発展する。高専や大学への受験生が増加しはじめたこの時代を反映した新しい受験雑誌の登場であった。

当時の書院の入試情報をコラムの1から9に示した。ここでは書院時代の最後にあたる一九三六年から大学昇格が決定される寸前の一九三九年一月上旬までの内容である。

そのうち、コラム1～6までの小報は、書院の入試方法や入試問題内容に関する情報で、コラム1では上海でも受験出来るようになったことや靖亜大祭の予定までが報じられている。上海に受験会場が設けられた結果、このあと中

国在住の日本人子弟の受験生がふえ、入学者の中に彼らが確実にふえることになった。また、コラム2と3は出題の傾向と対策、コラム4では上海での日中間の戦争により、仮校舎を長崎の旧女子師範校舎に設けたことを告げている。このあと上海の本格的な徐家滙の校舎は兵火で焼失する。コラム5は面接の状況、コラム6は身体検査の状況を示しており、当時の受験内容と試験方法がうかがわれる。

それに対して、コラム7は書院受験の失敗記だが、内容をみるとこれは各県で行なわれていた県給費生試験の受験記であることがわかる。これにより、この時期の県が実施した試験の様子がわかる。この県の場合、三名の募集に五〇余名が志願し、相当の激戦であるとともに、この書院への給費生試験がかなりの人気であったことが伝わってくる。この県では学費の全額給付でなく、年六〇円の負担が

〈コラム7〉

同文書院県費生に敗れて

玄海の勇士

聖戦の全線に凱旋たる休戦の喇叭が響き渡って、今や数十万の戦士は静かな休養時に入りました。

昭和十二年度の全国官立高等専門学校の入学試験も漸く終了を告げましたが、今回、私は不肖の身も顧みず、某県の同文書院県留学生採用試験を受けて、不幸にも一敗地にまみれた玄海の勇士（？）であります。定員三名に何と志願者五十名余りでした。他府県でも大体此の位の競争さでしょう。然し恐れる必要は少しもありません。誰れもが秀才ではないから。

【国語に就て】

現代文、問、古文、問でさしたる困難なものではなかったようです

【漢文に就て】

二問で、問は孟子から出て居りました。書院志望者は、必ず孟子や論語を調べて置くべきでしょう。作文は「和」と言う題でチョット面くらったが、さすがは旺文社できたえた腕故あっさり書けたが、あっさり不合格になってしまった。私の予想では、満州支那に就てではなかろうかと思って居ましたが、意外な題目でひどく困りました。

【英　語】

英語に於ては和訳で、支那の面積、人口に関する問題が出た　故に支那に関した時事英文等に気をくばって置く事が特に必要

【数　学】

数学は七問で内算術一題、幾何三題、代数三題でなかなか難問がありました。

口頭試問は県視学から聞かれました。書院の所在地、内容、卒業生の雄飛先、家庭の事情、支那に対する抱負に就て聞かれました。故に支那問題に関する新聞の社説等には特に留意すべきです。

体検は極く簡単ですが、内臓だけは非常に厳格です。因に本県全留学生十二人中肺で倒れた者が四人も居るそうです。内臓の悪いものが合格する事は、殆んど不可能と言っても過言ではあるまい。充分体を練って置く事が必要でしょう。

次に先輩の言を書いて見ます。

東亜同文書院は国際都市上海にあり、四囲は田圃で取りまかれ、仏租界は十ぐ近くにあり。此処に角帽を被り、四年の青春期を送る事は決して無駄ではない。非常に男性的な気持がする。土曜ともなれば、書院生は自動車に乗込んで、魔都上海も何かと遊び廻る姿は如何にも大陸的である　或時は県人を訪問し故郷を思い、或は支那の現状を語り、或時は公園に繰出して行く書院生の姿は上海名物でもあり、支那美人、ミス上海等のメッチェンの憧憬の的でもある。何と書院生は幸福な事よ。

大陸に覇望を抱く、日本男子の絶好の搖籃地では此処を於て他にあるだろうか。亦書院には支那人学生も少しは居るそうで、実地に支那語も勉強が出来るが、支那語授業の厳格な事には新入生の度胆を抜くそうだ　秋ともなれば、紅葉したたる郊外に散歩に出かけ、我が世の春を謳歌する事の出来るのも書院生の特権である。ミス上海の顔をおがむだけでも相当な代物だのに、まして恋もささやけるのだから。

何と書院生は幸福な事よ。次に本県の志願者規定は二十五歳までの男子であります。入学して年に六十円全納すればよいです。或る県の如きは全然給費の所もあり、貸費の所もあります。来春を目指して大いにやりましょう。

（一九三七（昭和十二）四月中旬号（受験旬報））

〈コラム8〉

受験界ニュース　募集要項第十九報

受験相談部

昭和十三年度　生徒募集要項抄（続）

【お願い】

（一）志願者は、必ず各自の志願校より心得書を取り寄せて御熟覧下さい。

（二）各校の内容の詳細、従来の競争率等は昨年弊社から進呈いたしました「入試宇鑑」を御参照下さい。

（三）尚不明の点は、直接各校の教務課なり当相談部なりへ御問合せ下さい。

東亜同文書院（私立）（所在地―中華民国上海徐家滙虹橋路第百号）

自費生

一、募集人員　約五十名

一、出願資格　中等学校卒業程度

一、出願期限　自二月一日至三月五日中ニ受験地指定本部宛出願ノ事

一、手続書類　入学願書及履歴書・出身学校長ノ証明書・身体検査表・写真・検定料金五円

一、試験科目　数学（代数・平面幾何）、英語、国漢文（商業業学校卒業者ハ数学ノ代リニ商業算術及商業簿記ニ就テ試験ヲ行ウ）

一、試験地及試験期日

上海	（三月二二日（月） （同　二三日（火）	上海東亜同文書院
福岡	（三月二二日（月） （同　二三日（火）	福岡市渡辺通六丁目福岡県立図書館
京都	（三月二七日（土） （同　二八日（日）	京都市中京区烏丸夷川上ル 京都商工会議所
東京	（三月三十日（火） （同　三一日（水）	東京市赤坂区葵町大倉高等商業学校

一、参考事項

入学競争率　六・四六（十一年度）

入学者得点（三百点満点中）　最高　二七〇点　最低　一八〇点

入学者学歴別（自費以外ヲモ含ム）　（中卒）九六　（商卒）一四　（其ノ他）一

合格者最高年齢　二十二歳　就職率　百%

（一九三七（昭和十二）三月上旬号（「受験旬報」））

あったこと、身体検査はかなり厳格に行なわれたことなどもわかる。そしてこの受験生も先輩から書院の情報を得、書院生の上海での生活に憧れ、大陸への雄飛を願っている熱い気持がその受験動機である。

コラム8はコラム7の県給費生でなく、途中から設けられた私費生用の募集要項である。募集人員は約五〇人で、参考事項に示された前年度の入学者合計一一一名の四五ハーセント分の人数がこの時期の私費生用の募集枠になっていたことがわかる。

コラム9も同様に私費生用の学生募集を伝えるもの。この中で第一志望の学生で成績優秀者に対しては無試験の選考機会が与えられ、それがかなわない時にも試験を受験することが可能であることという方法が示されており、書院が私費生についても全国から優秀な学生を集めようとしたこと、また昭和一三年度には競争率が九倍という難関であったことがわかる。またこの一九三九年（昭和一四年）一月のコラムでは、この時期に書院が商科大学へ昇格する可能性を示唆し、昇格が認められれば二年間の予科と三年間の学部、計五年間の修業年数が必要になり、従来四年制の専門学校時代に比べてさらに一年間延長になることについても知らせている。実際、この年の入学生は大学への昇格にともない予科生として入学した。

再び本表へ話を戻そう。

以上のようなさまざまな書院情報の中で、入学志願者は書院に対してどのようなイメージを抱いたのであろうか。

第四表はその点についてのイメージ内容の回答をまとめたものである。

〈コラム9〉

東亜同文書院

（所在地―中華民国上海海格路）

①入学資格

中学校卒業者及同資格者ニシテ大正七年四月以降ノ出生者

②入学者ノ選抜

府県費生及公費生ハ各其選抜規程ヲ設クル故志願者ハ給費ヲ受ケントスル府県又ハ育英ノ財団ニツキ承合ス可シ自費生ハ左ノ選抜方法ニヨル

一、無試験検定　本院入学ヲ第一志望トスル者ニシテ在学中各学年共及第者全数ノ十分ノ一以内ノ成績席次ニアリタルモノハ無試験検定ヲ出願スル事ヲ得、願書ハ当該学校長ヲ経由シ其学校長ノ推薦書ヲ添付スルコトヲ要ス、但シ口頭試問及身体検査ヲ行ウ

無試験検定出願者ニシテ銓衡ノ結果合格セザリシ場合試験検定ヲ受ケントスル者ハ、其入学願書中「検定ノ種類」ノ欄中ニ「無試験又ハ試験」ト明示スベシ

一、試験検定　数学（代数及平面幾何）、英語、国漢文ニツキ試験ヲ行ウ、但シ商業学校卒業者ハ代数及平面幾何ノ代リニ商業算術、商業簿記ニ付受験スルコトヲ得

一、試験期日　府県費生及公費生ハ各道府県及当該団体ノ定ムル期日（概ネ二月ヨリ三月初旬）ニ之ヲ行ウ自費生ハ三月中ニ東京、京都、福岡及上海ニ於テ行ウ其期日及場所ハ毎年一月中之ヲ発表ス

③出願期限

無試験検定ハ二月一日ヨリ二月二十日迄

試験検定ハ二月一日ヨリ三月五日マデ

④出願書類

（イ）入学願書及履歴書

（ロ）出身学校長ノ証明書

（ハ）身体検査表

（ニ）写真

（ホ）検定料金五円

注意　本部ニ対スル照会、入学願書、証明書其他ヲ上海ニ設付スルモノアルモ右ハ必ズ東京本部（東京市麹町区霞ヶ関三丁目東亜同文会）宛トスベシ

⑤徴兵関係

本院学生ハ徴兵令ニヨリ徴集ヲ猶予セラル

⑥注意

東亜同文書院ハ従来四ヶ年ノ専門学校令ニヨレルモノナル処之ヲ昭和十四年四月以降ハ改メテ大学令ニ依ル商科大学ニ昇格セシムル為メ目下認可申請中ニ付之ガ実現ノ暁ニハ中学卒業又ハ之ト同等ノ資格ヲ有スルモノヲ入学セシムベキ予科二ヶ年、学部三ヶ年計五ヶ年ヲ修業年限トスル専科大学トナリ其学資金ハ従来ト同様年額六百六十円ニシテ毎年々額ニハ変更ナキモ従来ノ四ヶ年制ニ比シ壱ヶ年延長ノ結果夫レダケ増額ヲ来ス

若シ右昇格認可ガ昭和十四年四月新学年迄ニ間ニ合ハザル場合ニハ従来ノ通リ四年制ノ専門学校令ニヨルモノトス

右ニ付本年一月更ニ入学志願者心得ヲ請求スベシ

⑦参考事項

入学競争率（十三年度）

志願者数	受験者数	合格者数	競争率
八、四	六五一	七〇	九・三

（一九三九（昭十四年）一月上旬号（『受験旬報』））

それによると、最も多いのは中国で活躍している書院のイメージであり、それに「国際性」、「日中親善」や「中国研究」、「アカデミック」というイメージを加えると、全体の三六パーセントが中国での国際的で中国研究に打ち込んでいる学校（大学）というイメージになり、四〇期以降の書院大学時代には大学昇格もあってか「アカデミック」なイメージを抱いた回答がつづいている。また、「よい学校」、「異色な学校」、「ロマン」を感じる学校、「自由と開放性」や「魅力」などのイメージは、それを合わせると三八パーセントに達し、最も多くなる。これも前述の中国で活躍する学校のイメージと関係しており、全体としては外地中国でのびのびと研究する学校というイメージになり、それが受験生の心もつかむことになったといえよう。

第五表は書院志願の志願順位に関する回答と親兄弟に書

第４表　入学時に抱いた書院のイメージ

内　容	期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44	45	46	合計
海外（中国）で活躍	8	1	2	3	2	8	6	2	3	4	1	40
よ い 学 校	2	1	5	6		2	3	1	6	2		28
異 色 な 学 校	2	1	1	5		4		1	2			16
ロ　マ　ン	3	1	1	1	1	2	4	2	4	4	3	26
自由、開放性	1	2	1	2		2		4	3	2	1	18
魅　　力	2		5	1	1	1	1	1	2	1		15
国　策　性	1	1			2	1		1	2	1		9
国　際　性			1	3	2		3	1	1	4		15
日 中 親 善	2			1	2	1			1	3	2	12
中国研究校	1			4			2		1	1		9
アカデミック					2	1	1	1	2	2	2	11
モ　ダ　ン			1			1	1			2		5
入学してよかった	1	2		1			1		5			10
県費生の学校	1	1							1	2		5
親　し　み			1	1		1			1			4
創 設 者 の 志					1	1				3	2	7
ビジネススクール							1			1		2
そ　の　他	2				1			1	1	1		6
と く に な い	17	4	2	5	8	1		2	1	2	3	45
合　計	43	14	20	33	22	26	23	17	36	35	14	283

（1995年アンケートより作成）

第５表　書院への志望順位と親兄弟の書院への入学卒業者

内　容		期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
書院への志望順位		人														
	第１志望	32	10	34	27	18	26	25	13	29	13	15	18	11	6	277
	第２志望	8	4	9	11	4	5	6	8	3	3	4	8	4	4	81
	会社などからの派遣							2	1	1	3		1		1	9
	不　明	1	1	4		2				1			3			12
	合　計	41	15	47	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	349
書院生に親兄弟が	い　る	5		1	5		1	3	2	1	4	1	3	2	3	31
	い　な　い	38	15	45	33	23	30	28	19	31	13	18	24	13	8	338
	不　明			1		1		2	1	2	2		3			12
	合　計	43	15	30	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	362

（1995年アンケートより作成）

院生ないし卒業生がいるかどうかについての回答である。まず志望順位をみると、約八割が書院を第一志望として入学したことがわかる。コラムからもわかるようにかなり高倍率の厳しい競争に打ち勝って強く志望した夢を実現して入学した状況がうかがわれる。書院を第一志望としなかったケースは書院時代では東京商大や神戸高商など高商系と旧制高校、高師などでやはり高商系が第一志望であったこと、書院大学時代には旧制高校系が多く、それに軍関係の学校がみられる。また、一八期生からは会社や外務省から書院への派遣制度が認められるようになり、志望順位にかかわりなく入学したケースもカウントした。満鉄や新聞社からの派遣生もみられ、入学生は多彩化している。

なお、身内に書院関係者がいる場合の書院への志望者が目立つのもその特徴である。同表によれば、入学者の約一割がそのような関係にあり、そのことが前掲第三表における肉親からの書院への推薦にもあらわれているとみてよい。それだけ書院が入学者によって支持されていたということになる。

第六表は最終的に書院へ入学することになった動機についての回答内容をまとめたものである。それによると全体の四割の回答者が中国での生活や活躍を夢見て入学したこと、次いで二割が学費の安くなる各県の給費制度のメリットをめざしたことがわかる。その他に中国とのかかわりを示す理由分を含めると、中国に活躍の場を求める動機は五割を越え、書院が中国にあったこと自体が多くの志願者を引きつけた最大の理由になっていたことがわかる。そんな中、中国で生活する日本人がふえ、また入試会場が上海に

第6表　東亜同文書院へ入学した理由（一部に複数回答含む）

内　容	期～33	34	35・36	37～39	40	41～45	46	合計
中国で仕事、生活したい	19	10	17	14	11	78	12	161
県費制度、学費安い	16	8	11	8	4	32	2	81
入試制度、派遣制度	1		5	1	3	6		16
地元中国育ち	1					18	3	22
先生のすすめ	1	1		2	3	4	1	12
親戚のすすめ	2	1	1	1		1		6
父兄のすすめ	2					3	4	9
先輩の講演を聞いて	3	1	3			4	2	13
身近、同級生の入学	1	1		2		13	2	19
身内が中国にいる	3		1			14	2	20
書院の特色、理念	2			1	1	3	1	8
軍事教練がない				1		2		3
使命感			2					2
好奇心			2					2
中国に近いから				1		1		2
遠くへ行きたい						3		3
合格したから				1		6		7
好奇心			2					2
そのほか	3		4			4		11
合　計	54	22	48	32	22	192	29	393

（1995年アンケートより作成）

設けられたことから、書院大学時代に入ると、中国在住の日本人の入学者がふえたこともわかる。その他では、前述したように書院へ入学した身内がいるケースは一つの特徴を示し、また書院へ入学した先輩による学校での講演がより直接の志望動機になって書院そのものへ強い憧れをもって入学したケースなど書院ファンが受験生の中に形成されていたこともうかがわれる。

第一図と第二図は、こうして書院へ入学を決定した回答者の出身学校の所在地を分布図として示したものである。そのうち第一図は書院時代の出身学校を、第二図は書院大学と同専門部時代の出身学校の分布図をそれぞれ示したものである。

両図を比較すると分布傾向にかなりの違いが認められる。すなわち、第一図に示した書院時代には、出身者が岡山や神戸、福岡、広島などに若干の集中傾向は認められるものの、全体としては全国的に分散的な分布を示し、県給費制中心の出身者による分布傾向がなおもみられることである。しかも、各府県からの出身者は同一の中学や商業校からの出身者がかなり目立ち、同一中学や商業校での書院への進学が継承的に行なわれていたことがうかがわれる。それは前述したように書院入学生が先輩となって後輩に生

〈コラム10〉

東亜同文ニュース

事変は何時終るとも分らぬが、江南の地には既に平和が訪れ、書院生一同は南洋大学の校舎で勉学に精を出している。来年は大学に昇格し、募集人員も二百五十名位に増加するとの話がある。

（一九三八（昭和十三）六月下旬号（「受験旬報」））

〈コラム11〉

特　倡　集

同文書院特倡

硝煙濃めやらぬ大陸に思いを馳せつ、ここに昭和十三年の新春を迎えてより既に二ケ月、靖亜の同志健在なりや!!

東海の一小国日本、悠々三百年太平の夢破れてより茫々六十年、内自からの力を養い、今正に風雲東するの秋を得て、躍進膨張の大流に棹さしたのである。我等は最早や後には引けぬ激しい流れに自から躍り込んだものと覚悟せねばならぬ　我等は躊躇を要しない。我等には只前途に靖亜あるのみ。

そして、今や靖亜の理想の下にここ幾星霜三千の同志を世に送り来りし、我が東亜同文書院の真面目を発揮すべきの秋なのだ。この秋に当って不幸我が江南の学舎は、敵匪の放火、掠奪する所となり、計らずも我等は故国長崎の地に髀肉を嘆ずる身となった。我等は只光栄ある第三十八期生を滬城上海にて迎え得ざるを憾れた。然し幸哉。我等は今旧校舎と相近き中国国立交通大学の校舎を得て、この四月再び懐しの上海に戻ることとなった。かくて我等は諸兄の希望に反かざる東亜同文書院として諸兄を迎え得るを確信す。

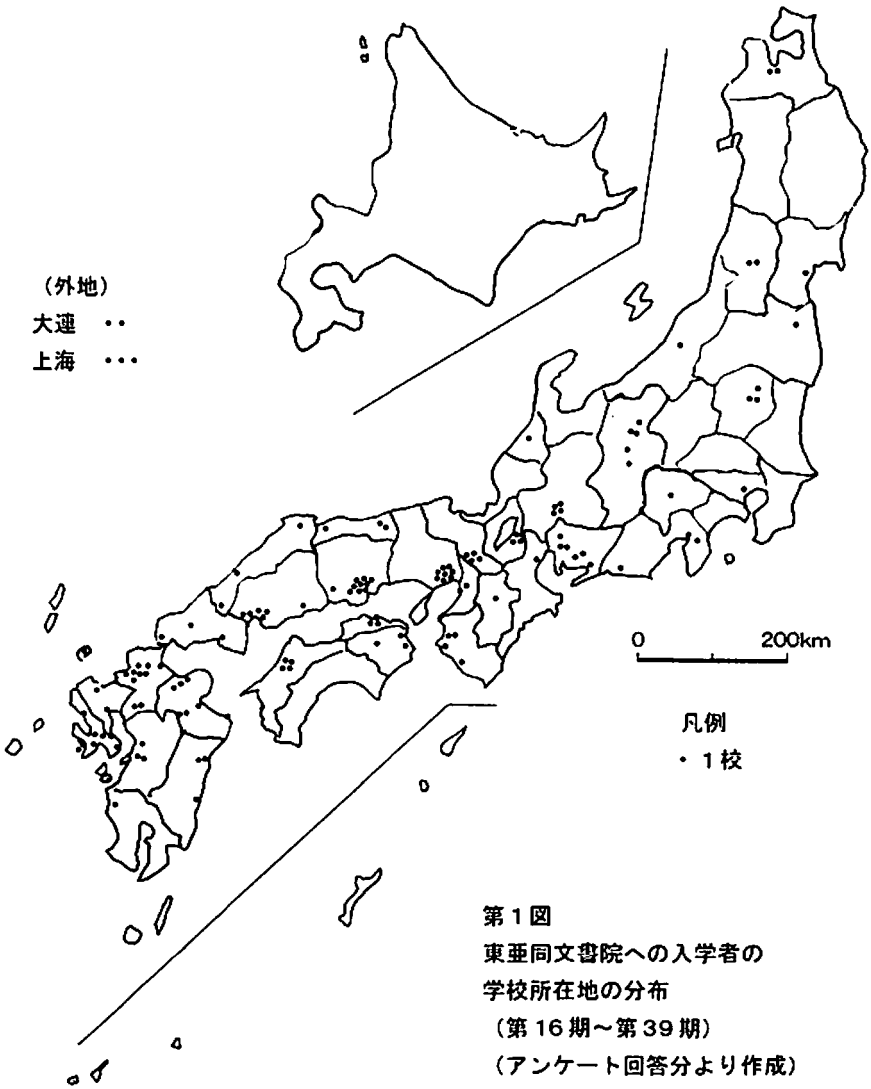
聖戦も近い。長崎県に於ては県費生四名に対して四十五名の志願者と聞く。二月中旬には私費生の募集も発表となる。真に東亜の大陸に身命を賭して活躍せんとする熱ある若人の入学を希望して止まぬ。白雪霏々、寒風凛凛たる頃、諸兄猶自愛努力せられよ。我等は諸兄の勇姿をあの長江を溯る巨船のデッキに迎える日を待って居る。

同文書院ニュース

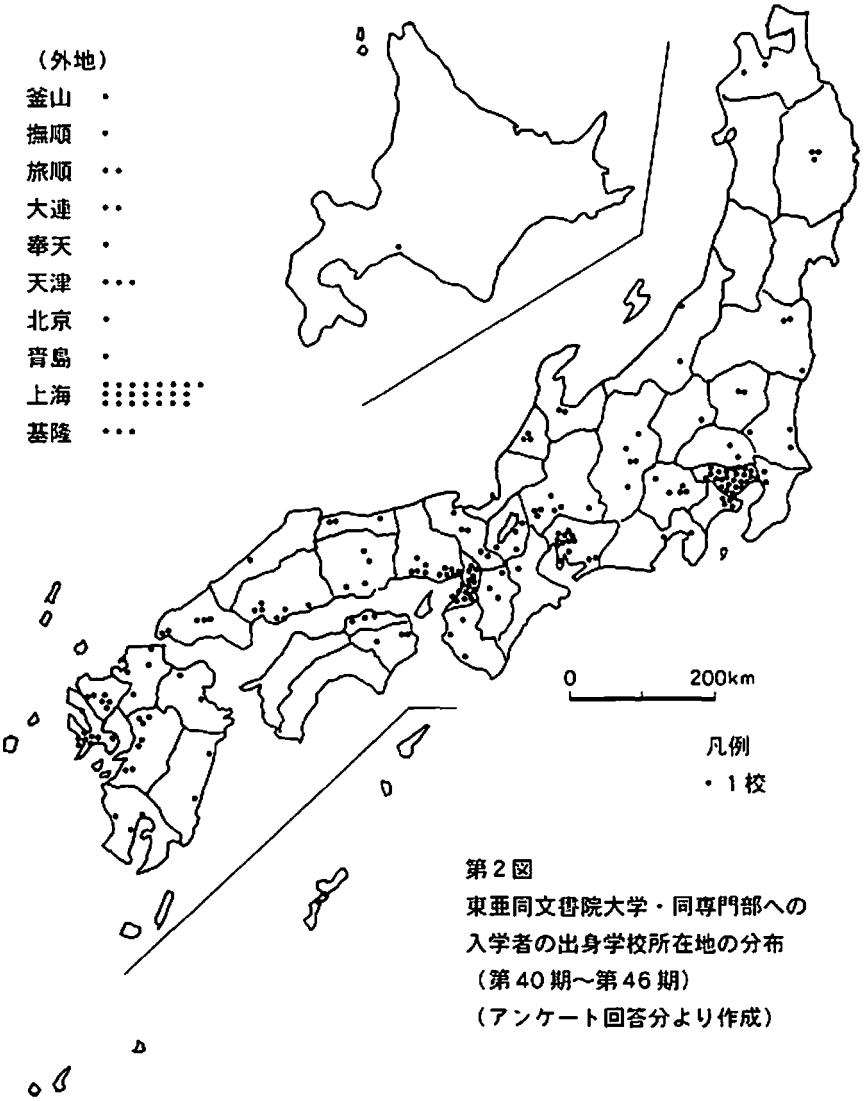
東亜同文書院の大学昇格問題は、過去数年来屢屢論議されて居ったが、今事変を契機として俄然表面化するに至った。即ち昨秋学生中にても、各学年より三名の運動委員を選挙、学校当局及び東亜同文会（近衛文麿公会長）の運動を支持すると共に、先輩間に一大運動を捲き起すべく働きかけて居る。

最近北支に於ける日本文化事業の一つとして同文書院を北平に移し北支大学とするとの事が新聞紙上に伝えられたが、之は同文書院本来の使命に依りても、同文書院は上海に復帰すべきなりとの大内院長等の反対意見によりて沙汰止みとなった。然し同文書院がここ数年なら中して、大学に昇格することは確実と見られて居る。

（一九三八（昭和十三）二月下旬号（「受験旬報」より））



第1図
東亜同文書院への入学者の
学校所在地の分布
（第16期～第39期）
（アンケート回答分より作成）



第2図
東亜同文書院大学・同専門部への
入学者の出身学校所在地の分布
（第40期～第46期）
（アンケート回答分より作成）

書院が大学へ昇格し、またそのあと専門部を設置することで入学定員が大幅にふえ、その数が府県から選抜される給費生の数を大幅に上回ったからである。そのような中、私費で大学へ進学できる志願者は、結果的に都市部へ集中することになったものということができる。このことは学校制度の変化とともに、書院生の気質にも影響を及ぼした可能性を示唆している。また書院大学時代は日中戦争がより激しくなり、書院生の勉学条件にも支障が生じ、書院時代とは大きく異なる環境もそのような気質の違いを生み出した可能性が考えられる。

また第二図が示すもう一つの特徴は、以上の点とも関係するが、大陸諸地域の学校からの書院大学への進学者が増加したことである。同図の左上に示したように、上海や天津、大連、旅順、および台湾の基隆などからの入学生が急増し、とりわけ上海出身者の急増ぶりが目立つ。上海の場合、ほとんどは上海日本中学の出身者である。これは前述したように、この時期には上海にも試験会場が設けられたことと、上海における日本人が高等教育を受けたいという進学希望への動きが東京や大阪に出身者が集中するのと同じ傾向としてあらわれたものとみることが出来る。

この第二点目も含め、以上のような入学者の出身地に関する大きな変化は、入試制度や学制変化とともに書院史の中ではきわめて大きな体質変化が生じたものと言うことができるだろう。

〈コラム12〉

東亜同文書院大学に昇格

本校の大学昇格問題は、今迄に種々の迂路曲折を経たが、興亜院の成立と共に俄に順調に進捗し、同院最初の興亜文化費一千五百万円は略何等の削減なく議会の通過をみる筈であるが、その中に同文書院の大学昇格並にその経常費百一万円が含まれ、大学昇格は茲に確定をみたわけである。学制は経済学部を中心とした単科大学で、経費の内訳は、校舎の建築その他昇格に要する経費二十八万円、経常費七十三万円となっている。当局が本校を大学に昇格せしめたのは、支那の本質を知る為の基本調査、支那民衆繁栄の前提となるべき経済的研究を高度に行う為に企図したもので、昇格以後の本校の将来に対しては各方面から多大の期待をかけられている。

（一九三九年（昭和十四）四月上旬号（『受験旬報』））

東亜同文書院ニュース

去る六月五日附を以って、東亜同文書院大学予科は丸嶋自雄一条となった。これにより本校生は益々張り切っている。

（一九三九年（昭和十四）七月上旬号（『受験旬報』））

の書院情報が伝達されやすい環境が形成されていたことによるものであろう。また出身校をみると、戦前において各地方地方に設立された有力な学校が多く、それらが書院の人材も支えたということになる。

一方、第二図に示した書院大学・同専門部の出身地は東京、大阪、神戸、名古屋など当時の大都市部への集中的分布が特徴的になっている。とりわけ東京と大阪への集中化傾向がいちじるしい。この大都市以外はかなり分散的分布がみられ、その部分については第一図に示した分布傾向と共通する。このような分散的分布は各県の給費制によって選抜されたケースが多く、出身学校も書院時代から継承されている傾向が認められる。

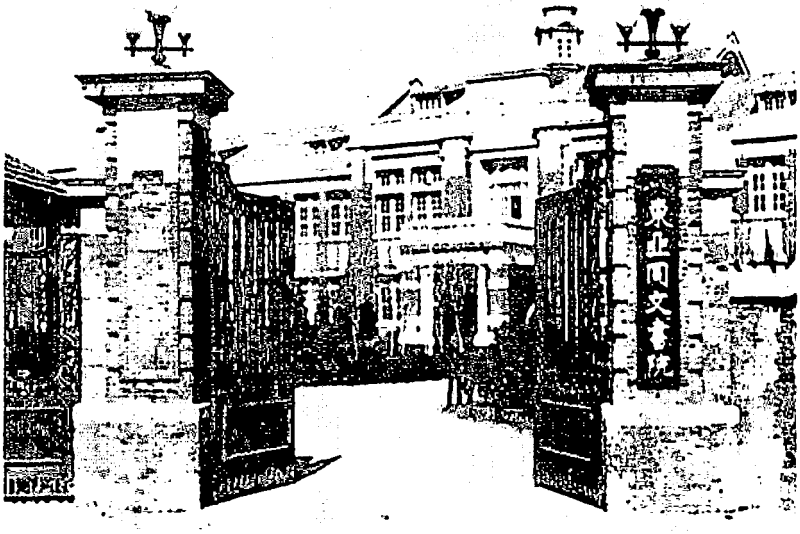
この第二図にみられる大都市部からの出身者の集中は、

四、書院への入学をめぐって

こうして難関の入試を経て合格者は憧れの書院生となり、上海の地へ向かう。そのさい、前述したように、新入生は東京へ一旦集合し、中学時代にはほとんど訪れるチャンスのなかった東京、伊勢、京都、大阪等を巡り、日本をそれなりに見て、日本の実情や文化、日本精神を体験した上で国際都市上海へ向かうことになる。根津初代院長によって工夫されたこの方法は最後まで継承された。当時の上海は列強を中心とした国際都市であり、日本のどの都市に比べても町はにぎわい活気を呈していた。大都市での生活経験のほとんどない中学卒業直後の新入生には別世界の感を抱かせたに違いない。上海へ出かける前に日本の大都市を巡る方法はこのような新入生のカルチャーショックに対する緩衝的な役割も果たしたものと思われる。

コラム13はそんな新入生の上海という別天地へのいざないの文章だとみれば、そこから当時そのような体験を味わったこのコラム執筆者の気持が正直に出ているとみることができる。なお、このコラムが書かれた一九三八年（昭和一三年）は大学昇格の前年にあたり、まだ書院時代。またキャンパスは校舎が焼失して長崎に仮校舎生活をしたあと、元の書院キャンパスに隣接していた南洋大学（のちの交通大学）を借用し、上海へ再移転した直後の時期にあたる。

この入学時における新入生時代の思いについてアンケー



写真Ａ　新装なった徐家滙虹橋路のキャンパス

〈コラム13〉

同文書院を語る

同文　上海生

抑々も我が書院は……と述べるまでも無く、現首相近衛公の父君月清山公が創立された物で本部を東京に置き、東亜同文会と称して麹町区三年町に豪華な建物を誇っている。そして全国の知名人士を以て会員を組織している。四十年の光輝ある歴史と二千数名の先輩を出している。時間清戦役当時、密偵となって満洲に入り、辛金洲にて捕えられ、斬首された壮烈無比な、蜷山、勇士も、亦我々が先輩である。一方現在日本内地で活躍されている最も著名な先輩は元外務次官珍田捨巳氏、元海軍次官、宮川次郎氏等である。支那満洲では枚挙に遑ないので略する。

次に参考までに入試のことを書添えておきます。御承知の様に本校には府県費生と私費生とがありますが、ここで私費生に就いてのみ述べることにします。

三月二十一、二の両日福岡、二十六、七日京都、一、二の両日東京で施行されます。場所も毎年一定して殆んど変らなかったのですが、今年は京都のみ変りました。科目は英数国漢で、各科目百点、英国漢一時間、数学一時間半、時間がないので相当手際よくやらねばなりません。英語……英語和訳四英作二、前者は理論的なもの、後者は教訓的、随筆物、論理的なもの多種であり、全くの良問揃い。漢文は保坂氏の綜合的研究から全部出題国漢……国語は保坂氏の綜合的研究から全部出題された様に思います。漢文は教科書と漢文法を重視すること、国語二文は三、漢文二、内一つは自文。

数学……入試合否の過半を決定する科です。極大、極小応用問題（水とアルコールの知き）根と係数、一定問題等が出される様です。幾何二、三題の組合で出題されます。

本年度合格者の最低点は二百点、最高点は二百七十点でした。本年度の志願者は八百二十名中受験者は六百二十数名で入学者は六十名でした。

入学した大抵の者は他の学校にもパスしています。S君は七高にもパス、Y君は松山高校、K君は横商専、T君は商大予科と小生の親友に於てもこの様です。

尚口頭試問は相当突っ込みますからその積りで、間違っても良いから明瞭に答えて下さい。又体操は非常に重大ですから心配に及びません。

合格発表は四月一、二日頃で上海迄十分電報でこの通知に接した者は、先ず東京に集合し近衛閣下の饗応に接します。この時は同責任の車、且つ大名の事を言います。

それから東京、伊勢、京都、大阪等十日に亘る楽しい旅行を終えて、四月十二、三日愈々憧れの上海に着きます。二十三十番の大建築物に目を見はり、見慣れない二階バス、親子電車、聞き慣れない支那人の喝声、美しい外国婦人とスマートな外人武官に見とれ、他方二十世紀の物としては およそ縁遠い黄包車若力車と、社会表裏両面を眼前に見、何かわけのわからぬ興奮の中にまき込まれます。

今回事変に依り旧書院は全焼し、今は前国立南洋大学（交通大学）にあります。所謂"焼け肥り"と言う訳で、敷地十万坪の全く物凄い様な建物が聳えています。内地の官立専門学校なんて問題になりません。全り尽せりの完備せる校舎は一瞥して諸兄を驚倒せしむるに足ります。

そして書院生は雲力ラッシュ者鼎立の様で、ストーム入り寮南山あり、高校生活と全く同じです。学校授業の第一科目たるものは内地商科の英語に対して十一時間で、一年終了とある先ず普通の会話には不自由はないと言う迄鍛錬されます。だから支那語の時間は特賞刻です。朝夕各々一時間位二年生の指導を受ける様になって居り、日常の生活には随分支那語が入ってきますので、必然的にどうしても勉強しなければならぬ様に出来ています。次に辛くて不可を取り易いのは英語と簿記です。他の学科は大した事はありません。尚我々が学ぶ支那語は南京官話です。支那語とは全然違い、随って所謂北京官話とは、本校にデパートなんかで買物も英語でやります。プロークンでも心臓を強くしてやる事ですな。ここで一つ自転車（日本の自転車ではありませんぜ自動車です）に乗って校内庭を一覧しましょう。

橋を渡り唐式様の門をくぐると自動車の往来が自由に出来るアスファルト通路がずーっとついています。右に曲って右にあるのが英国イートンスクール式建物の華麗な図書館、道路の両側には、アカシヤが繁茂しています。行くこと二百米にはなっていますが、三階建てやはり英国式で四百人の書院生が皆充分入れます。それから行くこと五十米、中院と言います。今西部から中院生徒が全部居候（？）で書院専用バスと院長の自動車が入っています。それから又左に折れて建仁寮、これは事務室、院長、副頭室、応接間、会議室、学生課、支那研究室等の三階建て、隣りが体育館で室内プール、体育館、日本間室、ビンポン室、学生ホール室等です。次は職員クラブです。ここで一つ左にまがって二百五十米程の道路、元の校門に至ります。結局、二百五十米に二百米の矩形で、その外側に主要建物があり、中は全部老生です。その他教室は上院より一歩奥に離れて形をなしています。三十室。他は三拾数名方の教授の研究室となっています。

建仁寮と上院とのかどに食堂があります。ドラが鳴ると飢えた狼（？）の如く押しこ寄せます。寮は大体五人の豪華なものです。病院には医師一人に五人の看護婦がおり入院は無料ですが、この無料は余り有難くないですね。寮は東、西南北の四寮であります。全部洋式で新しい。ベッド、机、洗面台、洗面所、支給品、ラック、野球場、弓球場は四百米トラック、テニス、排球、弓道もあり、運動は強制的に人部させられます。今年は剣道が全国高専大会で優勝しました。これ一通り揃ない小生の書院アウトラインを終ります。

最後に大学昇格問題ですが、十分通り昇格しそうです。昇格不昇格に拘らず運動が起るのは書院発展の一端を裏書きするものではないでしょうか。この問題に就き馬場教授は「昇格の具体的原案は予科二年とし、人員二百五十人に増加し、科は法科と従来の商務科とする」と語られました。

では「来年江南の地で再会する日の一日も早からん事を祈りつつ擱筆致します。

書院に関する質問は小生迄（姓名在社）御一報下されば御返事申上げます。

（一九三八（昭十三）十月下旬号（受験旬報））

トをいつくかまとめた。

第七表は船で上海へ上陸し、上級生の出迎えを受け、南京路を抜け、フランス租界を抜けて市街地の西方にある書院キャンパスへ到着した時の書院への印象についての回答内容をまとめたものである。ただし、三八期生からは徐家滙海格路の南洋大学（交通大学）のキャンパスへ入学、それ以前は徐家滙虹橋路のキャンパスへの入学である。この虹橋路のキャンパスは市内を転々とした書院が一九一五年に本格的に建設した最高のキャンパスであり、書院の発展と円熟期はこのキャンパスで実現した。しかし、一九三七年の日中戦争の始まりの中、第二次上海事変で中国兵の放火により全焼し、すべてが灰燼に帰してしまい、一時的に長崎で仮校舎を設けざるをえなかった。南洋大学は欧米系建築であり、各建物は偉容を誇っていたし、焼失前の虹橋路の校舎も当時としては日本人用の絵ハガキになるほどの瀟洒な建物からなるキャンパスであった。書院は焼失後新キャンパスの再建をめざし、その準備にかかるが、時局の緊迫した状況下では容易ではなかったことが東亜同文会の資料に見える。

同表では書院大学時代については、予科と専門部とを分けて示した。それによれば、各期の入学生ともさまざまな印象が語られているが、最も多いのはキャンパスと校舎建物の見事さの印象が強い。その理由は前述した通りである。次いで先輩達からの大歓迎とそれによって異国の地で安堵し、また緊張や不安の交錯した様子もうかがわれ、そのような中に先輩達の豪傑や県人意識でのやさしさ、自由な明るさと質素なバンカラ風やそれらの中での大陸的ふん

第７表　書院を見た印象

内容	期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44 予科	44 専門	45 予科	45 専門	46 予科	46 専門	合計
立派だ	6	2	8	4	2	6	15	3	16	5	9	7		2	85
風格、建物	3	2	4	2	1	4	1	4				2			23
大歓迎された	2		4	2	3	6	4	2	2	1	1	1		1	29
安堵し	3	3	6			2			1	1	1	1	1	1	20
感激	1	2	6	1	3	2			2	2	2	3		1	25
緊張	2	1			3		1	1	1			3	1		13
不安	1			1			1			1	1				5
明るさと自由				4	1	2	2				1		1		11
良好な環境	4	2					1	1			1				9
予想通り	2		1	1			1			1					6
予想以上	1			1											2
大陸的							3	3	2	2	3	3		2	18
質素、バンカラ	3		3	1	3	1	1	2	1	1					16
すごい先輩							1	2	1			3	1		8
ユニークな学校			1			1				1		1		1	5
県人意識、きずな	1					1		2	1						5
理想	1		3												4
日本の学校			2		1										3
とくにない	1		2	4		1	1		2		3		1		16
その他	2				1	1	1	2	1			1	1	1	11
合計	33	12	40	21	18	27	33	22	30	15	22	25	6	9	314

（1995年アンケートより作成）

いきをかぎ取った新入生もいたことがわかる。

そのような中で入学時の新入生はどのような希望を胸に抱いたのであろうか。

それを示したのが第八表である。

それによると前掲第六表の入学理由で示されたように、中国で就業し生活したいという最も多い理由が、入学が実現したことによってさらに具体的な夢となってあらわれている。すなわち、最も多い夢は、「中国で将来働らき中国で骨を埋めたい」という、大覚悟を決めた夢であり、それに「日中両国民のために働き尽したい」、「中国人のために尽したい」という夢を加えると、全体の過半数を占めるほどの大きな夢となる。その他、「中国を見、学びたい」、「中国語を学びたい」を加えると、全体の約三分の二が何らかの形で中国に関心をもち、中国とかかわりたいという大きな夢をもっていたことになる。そしてこのような夢は後述する卒業後の就職時にかなり実現している点で、入学生そして書院生の強い意志と決意のほどがうかがわれる。

また第九表は新入生として生活することになった上海の印象に関する回答をまとめたものである。なるべく回答された言葉をそのままキーワードとして生かす形でまとめたものである。したがって当時の上海の街のふんいきが日本人青年の見た印象として素直に表現されているとみてよい。

それによると、上海の街のスケールの大きさと異国風の国際都市として活気あふれる町の印象が最も強いが、同時に雑然とした町とそこで明白にみられる多くの苦力に象徴される貧富の差の大きさ、華やかさと貧しさの同居する町

第8表　入学時の夢

内容	期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44 予科	44 専門	45 予科	45 専門	46 予科	46 専門	合計
中国で働く、骨を埋める	10	3	8	10	8	7	3	4	9	4	2	8	8	3	87
日本と中国・アジアのために	6	3	11	4	2	3	6	5	8	3		5	2	1	59
中国人のために	2	2		1		1	3	2	1		1	1			14
中国を見、学びたい			8	12	2	3	2			5	2	3		1	38
中国語を学びたい	3	1	1	1		3	2		1		2	2	1	1	18
有能な事業者と社員	1		1		2	1	2			1	1	2	1		12
アジアで働く	2				2				1	1		1			7
外交官になりたい	1						1		3	2		2	1		9
国際的仕事をしたい			1		2							1			5
ロマン、好奇心	1							1				1			3
親孝行				1										1	2
努力したい	1		1		1										3
社会貢献したい	1		1		1	1			1						5
東亜の平和のために					2	2	1								5
自由に						1				1	1				3
喜びのみ					1			1			1				3
広く学びたい						1	1	1							3
楽しく過したい						1	1								2
その他						1			1			1		1	4
なし	3	2	2	4	1	3	1	2	1	1	3			1	24
合計	31	11	34	33	24	28	23	16	26	18	13	27	13	9	306

（1995年アンケートより作成）

第９表　上海の印象

内　容	期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44	45	46	合計
雑然、活気	4	2	10	2	3	5	4	4	5	7		46
大都会、広大	13	1	8	5	3	5	6	1	10	8		60
国際都市	3		4	2	4	9	8	3	4	6		43
貧富の差、苦力	5	1	2	1	2	7	5	2	10	4		39
覚悟、見構えた	2	1	2	6	2	1	3	1		1		19
列強支配がみえた			1	3		2	1			1		8
ロマン、明るい、自由							2		2	4		8
人が多い	1		2	4	1	2	1	3		2		16
異国情緒	1		2	2	6			6	2	5		24
イギリス風	1	1		1	1	1	1	1	1	1		9
ビルが多い	2		1			1	1	1	2	3		11
圧倒された	1	2		1			1					5
故郷のようだ				2	1				2			5
さすが大陸	1	1	3	2								7
幻滅、無気味		2		1				2				5
華やか	3					1	1	1				6
とくになし			2	1		1	1		1	3	2	11
行けなかったのが残念											20	20
その他				1		1	2	1	3			8
合計	37	11	37	34	23	36	37	26	42	45	22	350

（1995年アンケートより作成）

町にも強い印象を受けている。あまりのすごさに思わず身構えたと回答した例も一九人を数える。他の回答内容もいずれも以上の印象を他の面から述べたものであり、これらを通じて当時の上海のふんいきを十分うかがい知ることが出来る。

当時の上海はフランスやイギリスの租界をはじめ、日本やアメリカも進出、ロシアの亡命者や植民地化された朝鮮からの移住者、インド人などを中心に多くの国の人々が居住し、書院教授の馬場鍈太郎は「支那研究」第一八号[9]の中で、それら外国人の人口は一九二五年の時点で約三万人、中国人の人口は公表されたデータで約一二五万人だとする。もちろん、中国人についてはカウントされない人口も多く実態はもっと多かったに違いない。バンドや南京路には列強資本による金融機関などが高層ビル建設を競い、そのような高層ビル群をみた新入生にとっては大変強烈な印象を受けたに違いない。港に着岸するや多くの苦力達に取り囲まれ、その異様な光景に身をたじろかせたこともあろう。この第九表はそのような上海の息吹が伝わってくる。

五、書院での学業と生活

(一) 書院教育

こうしていよいよ書院での生活が始まる。入学生は全員上級生と組み合わせの寮生活を送ることになる。つまり書院は全寮制であった。

寮生活において上級生と下級生の組み合わせは、出身県単位の組み合わせのケースも多かった。一つは同一出身県であることが新入生を早くなじませることができたし、また上級生が新入の下級生の中国語の発音を朝夕トレーニングさせるのにこの組み合わせは有効に利用され、発音練習の声がキャンパスに響いて「書院カラス」と称された。また最上級生の「大旅行」の準備や帰校後の報告書等のまとめや執筆を直接見ることで、下級生は上級生の「大旅行」の方法を見ながらにして収得できたし、それは「大旅行」に限らず、他の学業やクラブ活動についても下級生は多くを上級生に見習い、このような中で書院生の伝統が上級生から下級生へと継承される仕組が出来上っていったといえる。

〈コラム14〉

東亜同文書院短信

一般に上海は極めて不健康であるかの如く考えられているが、決してそんな処ではない。気候もどちらかと言えば良い方だと言える。夏は暑かい暑いが、七月一日から休暇になる吾々学生には些して影響のないことであるし、冬は割に暖かで、先年四国・紀伊辺りのそれに近いと言えるだろう。雪の積ることなんかは年に一度あるかなし、随って先ず健康地と言っても差支えない位である。だから学生の中にも罹病者は左程多くはない。学校では常に体育を奨励して居って、医療機関の方も附属病院が校内にあり、学生はこれを無料にて利用出来る。同病院には入院設備もあるし、その他の設備も凡て完備して居るので、この方面の心配も要らないから安心して受験せられることを希望する。

(同文書院　一会友寄)

(一九三七(昭十二)三月下旬号(受験旬報))

書院での実際の生活はコラム14とコラム15の中に述べられている。コラム14は上海の気候風土についてその温和な気候を強調している。もちろん、気候だけでなく水や食事など異った風土の中で初年度に体調を崩すケースもみられたという。

コラム15は書院生の座談でやや長いが、校舎を失なったあと揺れ始めた当時の書院生活が多方面にわたってふれられており、ここではそのすべてを掲載することにした。受験生向けのガイドではあるが、座談会に出席した書院生達が書院を愛し、熱く書院を語っていることが伝わってくる。

このような長文にわたる座談会の企画は、これが掲載された直前に、前述したように日中戦争が始まり、書院の校舎も焼失する最悪の事態の中で、戦場にさえなった上海の書院へ内地からの志願者が影響を受け、大幅に減少するのではないかという危惧の念がその背景にあったのではないかと思われる。それだけにその直後の大学への昇格プランはそのような書院の抱いた危惧の念を吹き飛ばすほどの出来事でもあったし、それによって書院も再生し、さらにその上発展できる契機となる点での最大の活性化プランにも

〈コラム15の1〉

東亜同文書院欧文社会友座談会記『同文書院とその生活を語る』—昭和一四年一月—

出席者

原田豊作（静岡、沼津中学出身）
田中徹雄（山梨、日川中学）
佐原元一（大阪、生野中学）
田阪三雄（広島、県一中）
浅山益生（旅順中学）
今西照男（和歌山、海草中学）
田坂領甫（広島高師附中）
新井宝雄（橋王商業）
宮沢　宏（神戸二中）
加藤大助（青島中学）
立花正平（福岡、伝習館中学）
馬場　晃（滋賀、彦根中学）
浦　亮平（長崎中学）
菊池四郎（福島、安達中学）
塩崎美智男（大阪、八尾中学）
森脇俊登（兵庫、三田中学）
（速記　田中、今西、宮沢）

今西　皆さん、この間中は先輩や知人の年始廻りで鱈腹食ったり飲んだりで目の前の好的（果子の意、書院語なり）では物足りないかも知れませんが、まだ後からも遅好的（もっと良いもの」の意、元来「好的」とは「良いもの」の意である）も出ることになっていますから、ゆっくりお話願うことに致します。実は最近内地の新聞雑誌でも大陸建設と言うことが相当叫ばれていて、旺文社の旬報などの様な受験雑誌でも「読者の声」などに於て「我等の使命は大陸」と気焔をあげているのを見うける事が多くなって来た事は、我々書院生の様に大陸経営の第一線に乗出している者に取って誠に喜ばしいと思います。所が残念な事に、四十年に垂んとする歴史を持ち、数多くの人材を送り出して対支経営に貢献している我が東亜同文書院の存在を、地理的理由のために内地の受験生でさえあまりよく知っていない様です。此では今春大学になろうとしている我が書院の損失だけでなく、大きく国家の上から言っても忽にすべき問題でないと思いまして（ヒヤヒヤ然りの声）広く天下の受験生に書院を紹介すると言う意味で、この座談会を開いた次第です。ケーキやら点心（支那の菓子）も来た様ですから、ではボツボツお話し願います。

歴史

田中　書院紹介となる先ず歴史からだね。

浅山　詳しい事は俺もよく知らないけれど、明治廿三、二年頃、近衛文麿公の先代、篤麿公、根津山相先生、荒尾東方斎先生等が東京に同文書院を設立されたそうだ。其が義和団事件で上海に移ると共に、明治卅二年から専門学校としての充実した東亜同文書院の第一歩を踏み出したそうだ。

原田　その南京同文書院の前に、漢口に日清貿易研究所と言うのがあって、其れも矢張り書院の前身なんだ。

新井　何にしてもあの当時から大陸経営に眼を注いでいられた我等の先覚者は偉いね。今度の事変が始まって、初めて大陸研究の必要を感じたのとは一寸桁が違うよ。

浅山　それから大正二年七月に第三革命の勃発で兵火に焼かれて、ハスケル路仮校舎時代となったんだね。

田阪（三）　俺達も少し古い先輩に会うとよくその当時の話を聞かされるね。普通の建物を少し改造して仮校舎にしたのだから設備などは勿論なっていず、冬なども暖房装置なんてあるわけでなく、全く惨めなものだったそうだ。

加藤　前の徐家汇の校舎は何日頃出来たんだい？

馬場　あれは大正六年だそうだ。

浦　今の一年生なんか知らんだろうが、今から考えて見るとあの校舎も懐しいね。

宮沢　学校の桜が満開の頃、恒例の観桜宴もよかったぜ。俺なんかコッソリ酒を買い込んで来て。よく芝生の院子（庭の意）で飲んだもんだが。

田坂（領）　その頃はよく虹口（上海の日本人居住区域）から桜を見に来たね。

佐原　俺は去年の四月皆と一緒にあの焼跡へ行った時、懐しい校舎が見るも無残に焼けて煉瓦の壁ばかり残って立っているのを見た時は思わず涙が出たよ。

新井　皆図書館の焼跡で、灰になった書物が塊まって文字が残っているのを見つけて盛んに拾って帰っていたね。

立花　俺も持ち帰ったけれど、部屋に置いといたら何時か毀されてしまった。

事変勃発、長崎時代

今西　大分皆、感慨を新たにしていられる様ですから、事変当時、長崎時代の思い出でも話して貰いましょうか。

田中　盧溝橋事件の起ったのは夏休みが始って皆内地へ帰った後だったね。

佐原　俺は神戸へ上陸した途端にあの号外を見たよ。

原田　その後現地解決はつかず、事変は益々大きくなる、八月には上海に飛火するし、あの時分は全く心配だったね。

宮沢　学校からは帰院を暫く見合せる様に言って来た時には何だか休みが延びてうれしい様な気もしたけれど、ラジオで書院には支那兵が入っていると聞いた時には、これは危険だと思ったね。

塩崎　何にしても書院は仏租界の延長道路にあるんだからね。

菊池　長崎仮校舎に集ったのは何日頃でした？

田坂（領）　十月十三日に集って十九日から講義が始ったよ。

田阪（三）　四年生が早軍の通訳不足を聞いて血書して通訳従軍を志願する。久重先生や事務員の方も応召されると言う有様で、ツクツク事変の中にある我々だと感じたね。

〈コラム15の2〉

原田　四年生の従軍は四回に分けて出たね。長崎の港や、或いは駅頭へと小旗を打振りながら四年生を送って行って「私達は日頃の書院精神を以て我等の念願たる靖亜のために戦って参ります」と言う挨拶を聞いた時には感激してしまった。

立花　石井さん戦死の報が入った時には、誤報なれかしと皆お諏訪さん（諏訪神社）へ参ったね。

浦　而も其れが現実になって、一月の中頃だったか寒い北風の吹く日、学生一同で港に遺骨を迎えに行った時、悲しい哀悼の東の音に、俺はもう堪らなくなって泣き出したよ。

今西　それは誰だって同じだ。院葬の時だって奥前に靖亜を賀う学生代表の弔辞や、生けるに話す際に、泣きながら読んだ従軍学生の弔辞の時は、誰一人泣かぬものは無かったよ。

馬場　それから忘れられぬのは十一月三日だ「書院昨夜放火さる」の電報が来た日だよ。それから二三日して一日下全面に炎焼中と来た時には丁度昼飯の時だったが、皆んなはるか上海の空を思いやって黙祷したね。

新井　あれで十余万冊の図書が殆んど全部焼けてしまったのが、何と言っても一番大きな痛手だね。

浅山　全くだ。院長も図書館復興についてはとても尽力されているそうだ。各方面からの寄附も相当に上っているそうだ。

佐原　我々だって毎月四十銭宛出しているんだからなあ。

菊池　今春大学になれば、図書購入費も大分増えるでしょうね。

加藤　焼けた中には又と得難い資料もあるそうだけど、この調子でゆけば復興も案外早く行くだろう。それに南京で接収した図書が七十万冊程あったそうだが、其は書院と満鉄と自然科学研究所とで何とかするんだそうだ。

今西　大分脱線したけれど、長崎時代は色々の意味で思い出深いね。宮沢などは飲んだ方でも思い出が多いだろう。

宮沢　そうでもないですよ。でも書院生は一般によく飲むからなあ。

原田　書院が長崎に行って、おでん屋や喫茶店が大分流行ったそうだけれど、本屋も伸々儲けたそうだ。

田中　何と言っても書院生には活気があったよ。

新　校　舎

今西　今度の校舎は流石は国立大学だけあって広いね。十三万坪とか言ったろう。

森脇　僕は初めて此処へ来て、あの琉璃瓦の綺麗な正門を一歩内へ入って、図書館、体育館、上院、それから後に工程館、哲生館寮と宏壮な建物を背景にして、緑の芝生が萌えきる様な新芽をふいているのを見た時には素晴らしいなあと思ったよ。

菊池　時計台の上には日の丸の旗が翻飛と飜っていたね。

立花　この建物は我々書院五百の学生には一寸広すぎる位だね。

塩崎　所で、今日西部小学校の生徒が来ていなかったね。

田阪（二）　伊太利の兵隊が西部小学校の校舎を奪いたとかで正月から九の校舎に帰るそうだ。

田中　そうか、四月以来の様に小学校の生徒が居候しているが賑やかで良いね。戦争だなあ。どうせこちらだって教室が余っているんだから。

佐原　ユライ御熱心だね。五、六年の女の子に前途遼遠の計画でも立てていたのかい？

田中　馬鹿言え。

塩崎　実際今度の実験は結果的に「鬼太り」ということになったね。

森脇　まあそんな所だ。学校は大学になるし土地は広くなるし、寮の方も前よりは良いね。寝室と自習室と別で四人宛だから割合落ち付くよ。

宮沢　寮の名だけど、今度の南寮、北寮、西寮と言うより、矢張り前の様に靖亜寮、昭亜寮、明亜寮、興亜寮、振亜寮と言う方が良いね。

新井　前の焼けた寮の名をそのまま付けるのもオカシイなら寮名を学生から募集すれば良いよ。

宮沢　学校内に病院迄備えつけているのは少ないだろうね。

立花　それに好看（綺麗な）な看護婦も三人いるしさ。

原田　日用品や文房具は舗子にあるし、夜腹が空ればホールでうどんでもぜんざいでも、すしでも、又炒肉片、炒麺と大抵のものは食えるしね。

馬場　兎に角先輩なども此頃の書院はよくなったものだとよく言うよ。

浦　電話も各寮にあるからね。

今西　そんなら、この辺で一つ寮生活の一年を話して貰いましょうか。

新入生入学

田阪（二）　新入生が来るのは四月廿日過ぎだね。

新井　全くあれは待ちこがれるね。特に二年生は弟分が出来ると言うので……

菊池　四月十日頃新入生全部東京に集まって同文会長近衛公のお話を聞いた後、東京見物、それから伊勢、京都、大阪、神戸と十日余りの内地旅行も愉快だね。

宮沢　神戸から浅間丸で愈々船出する時は、俺淋しいと言う気持なんて全然なく、体の中が熱くなる様な、力が湧きあがってくる様な感じがしたよ。

森脇　愈々上海に着いて自動車に分乗し、共同租界、仏租界を通って書院迄約二里、意外を走る街の様子は珍らしいもんだね。

菊池　学校へ着いたら上級生が門の両側で拍手で迎えてくれる。爆竹がポンポン鳴る、日章しの県人会旗をさし上げて名を呼んでくれる。うれしそうな上級生の顔を見たら有難かったね。

田坂（徳）　所がその晩歓迎の寮廻り（ストーム）が盛んに行われて胆を冷やすのもいるね。

〈コラム15の3〉

支那語

佐原　一年生が来て一週間もすると「アーアーと書院鶏が鳴き出すね（アーアーと支那語の四声の練習すること）」

田阪（三）　こんな光景も天下一品だね。夕食後一時間半位、朝半時間位、二年生が一年生の相手をして音読の練習だからね。

原田　夕方二時間からかかってやっと読める様になっていても、その翌朝にはもう一人で読めないんだからね。

加藤　書院の支那語は正に天下一だよ。

浅山　そりゃ勿論だ。

今西　而も書院の支那語の試験と来たら一問取り即訳一だからなあ、これで鍛えられるんだから我々もツライと言うわけだ。

運動会、演劇会

浦　毎年五月の中頃に運動会があるね。この運動会は興味本位だから、紅白（日本人区域）から日本人がワンサと押しかけてくるし外人や支那人なども相当見物に来て、この日は書院も華やかになるね。

田阪（三）　某君の様に運動会そっちのけで活躍するのも出てくるし……。

加藤　競争がすべて学生対抗になっていて総点計算の結果、優勝学年に賞金があるから太鼓をタタクやら楽器を持ち出すやら、神輿を竿につけて振り出す奴やらで応援が愉快だね。

馬場　演劇会もその頃だったろう？

浅山　今年は事変の関係で無かったけれど、あれも一等は三十円程の賞金がついているので皆張り切って、玄人はだしの芸達者もいて大向ふをうならせると言うのも出て来るね。

大旅行

今西　その中に六月になると早速四年生の大旅行出発だ。

宮沢　あの大旅行送別の歌は実に良いね、一度皆で歌おうか。

（一）　嵐吹け吹け鉄嶺風
雪の蒙古にゃ日が暮るる
征戦照らす月影に
仰げば空に雁の声

（二）　ほんに忘りょか桂野里の
可愛い稚子さんが目に踊る
殺気満ちたる馬賊の唄は
何処で飲んだか酒臭い

塩崎　大旅行は何と言っても書院の華ですね。

浦　原田さんや、田中さんは今年はどの方面でしたっけ？

原田　俺は始め蕪湖で一ヶ月近く宣撫の手伝いをしていた。その間の話も面白いんだけど、軍の関係で話せないよ。それから北支をずっと廻って蒙古は包頭まで行ったよ。徳王にも会って話して来た。満洲はハルビン迄行って帰ったのが八月の二十日頃だった。

田中　俺は南洋班で友達三人で行ったが、台湾を縦断して香港へ、広東は遠慮して南洋の方のメダン、メラク、サマラン、スラバヤ、マニラ、その他各地あちこちと三ヶ月ばかり廻っていたら上海に帰ったのが八月末だったから家へは帰らず終いだった。

原田　旅行中にはとても苦しくて泣き出したい様な事も何度もあるけれど、先輩のいる所ではとても歓待してくれ、嬉し涙のこぼれる様な事があったよ。

佐原　書院の先輩は何処へ行っても居るね。

田中　大旅行中に人間が出来る様に思うね。

原田　苦しかった事も後になって見ると、実に楽しい思い出となるものだ。

佐原　今の三年も、もう大旅行の準備を進めているんだろう。

田中　エエ、もう籌備委員も選んだし、コースも夫々相談中ですよ。僕は三人で台湾、広東と行って粤漢線を北上して、中支、北支、満洲、朝鮮と廻って内地へ帰ろうかと思っているんだ。

夏休み

菊池　大旅行を送り出したら一ヶ月は先ず何もなくて唯夏休みを待つだけだね。

寺花　七月一日から休みになって、一年生などは二ヶ月ばかりいただけで又内地へ帰るわけだ。然も角帽で一応休み中にロマンスでも作ろうと張り切っているんだからね。

加藤　そして九月十日にはメッキリ黒くなった顔を懐かしの寮にあつめて、休み中の話やら、大旅行の話やらに花を咲かすと言うわけだね。

その後

森脇　夏休み後は、別に入して行事もないね。

浦　ウン、十月末の試験が控えているだけだ。

塩崎　試験の苦しみはツライが、その後が良いね。一週間許り休みになって、而もその頃は青く深く澄んだ秋晴れの好天気が待っているからなあ。

新井　ほんとだ、実際あの頃はいい。上海の秋は長いと言われるが、九月の中頃から十一月末迄は殆んど降らんね。

今西　この頃は運動も盛んだし、散歩にもよく出るね。

田坂（領）　ジェスヒィールド公園にもよく行くね。

浅山　俺はよくコロンビヤ・サークルを散歩するが、あの辺は外人女学生が半ズボンで颯爽と自転車をとばして来るのが多いよ。

馬場　十一月には又演劇会、競技会があるね。

今西　十二月に入ると少し冬らしくなる。

佐原　学校の教室、寮共にスチームが通るから寒さなんて感じられないよ。

田中　元来上海は雪の降ることも多くない位だからね。

田阪（三）　正月は書院生にとっても一つの楽しみだね。

森脇　此の間中も大分先輩の家を荒したね。

浦　うん、然しこれは毎年の例だし、年始廻りに行くと先輩の家でも実に快く迎えてくれるね。

菊池　全く書院の先輩て良い人ばかりだ。

今西　それから後は二月の中頃に四年生の試験が

〈コラム15の4〉

あり、三月の第一日曜が卒業式、この時には上海在住の日本有力者は勿論の事、上海市長、各国領事等来賓で賑やかだ。

宮沢　その時卒業生の答辞が日本語、支那語、英語の三国語で読まれるのも面白いね。

寧波杭州旅行

田中　三月十日過ぎに二年以下の試験が終ったら、休みの間に一年生の寧波杭州旅行があるだろう。

田坂（領）　去年は事変で行けなかったが、その旅行が又面白いんだ。寧波に上陸して、それから小さい民船に五人宛乗って大運河を杭州の近く迄溯行するんだが、あの愉快さは忘れられんよ。

浅山　その間が丁度三日だ。ずっと狭い船の中で寝起きするんだが、途中で遇を買い込んで自分でスキヤキを作って食うんだ。結構と言う酒の名所を通るから其処で酒を買って、それを飲みながら寮歌を歌って運河をのぼる時には全く支那に来たと言う感を深くするね。

田阪（二）　一年の終りで支那語もよく通じないから船頭と喧嘩したり面白いんだよ。

田中　杭州は良いね。山があって一寸日本に帰った様だ。

新井　西湖をボートに乗って遊ぶのも面白い。

原田　この旅行を終えて一年生も一寸ハクが着くね。

今西　これで大体寮生活の一年が終ったわけだ。

自治下の寮生活

田中　こうして同じ寮に若き青春の時代を喜びや悲しみを共に分って生活するんだから書院生に団結が出来ているのも尤だね。

馬場　而も自治制度でこんなに和気藹々の寮風を作っている学校も少ないよ。

宮澤　自治会で食堂から学生会館の経営等もやり、その外出禁止とか謹慎とかの処罰まで自治会で定めると言う如きは、書院の様に相互間の理解が充分に出来ている所でなければうまく行かんだろうね。

学友会、同好会、研究会

菊池　運動の盛んなのも一つの特徴だね。

原田　一年生が入って来ると、一応何かの運動部に属さねばならんのだからね。

田阪（領）　凡そ運動と名の付くものは何でもやってるね。無いのはスキーとスケート位のものだろう。

塩崎　運動の設備もいいしね、グラウンドは二百米の直線コースがあるからね。

森脇　テニスコートは八面あるし、室内プールも設けてるし、大したものだ。

立花　柔道と剣道は高専大会で優勝したし、庭球加藤　も昨年は今一歩の所で九医に優勝を譲ったね。

佐原　ラグビーも大シーズンとても頑張っている。相手は外人ばかりだが四勝一敗じゃないか。

今西　その外趣味同好の会がとても多いね。

浅山　音楽部だとか、尺八は先生を雇って練習している。

田阪（三）　絵の雅本会、短歌の書善園会、俳句の会もあったね。

馬場　精神的な方は無我会だとか向志会、山桐会、岳陽会などだね。

新井　研究会の方は文化研究会だとか国際研究会とか、民族問題研究会、高文準備研究会等、まだ外にもあるだろうが蓬沢山だ。

田中　こうして四年間に大陸経営に必要な身体と頭と精神とを自分らと言うわけだ。

大学昇格

浅山　四年間で、今度の新入生から五年だぜ。大学に昇格するんだから。

田阪（二）　遂に他達の学校も大学になったね。

去年長崎時代「大学にしろ」と学生大会を開くやらして騒いだものだが……。

原田　大内院長の手腕も大したものだね。

菊池　今度の新入生から予科生と言うわけだな。

予科二年、大学部三年とか言ったね。

立花　募集人員も本年は百六十人位にすると言う話しだ。将来はもっと増やすだろうが……。

森脇　これで他達も愈々名実共に大陸経営の最前線に立ってリードして行くと言うわけだ。

就職状況

今西　今年は内地の学校も就職状況はよかったらしいが、書院も猛かったね。百余人の卒業生に対して六百人余りの申込みがあったそうだ。

宮沢　而も書院へ申し込んで来るのは、支那に友居があるとか、こちらに乗り出そうと言う一流会社ばかりだから猛いよ。

田中　維新政府からも高給で迎えが来てるそうだ。

田阪（三）　兎に角、支那には書院の先蓋の礎いた地盤があり、何処へ行っても先輩がいるから就職してもとてもやり良いそうだ。

新井　我等の書院万々歳と言う所だね。何と言っても我等の活躍はこれからだ。

佐原　書院のモットーたる「靖亜」のためにお互いに頑張ろう。

宮沢　旺文社を通じて天下の受験者諸兄に、我々のこの張り切り方を伝えて貰おう。

今西　では大分長くなりましたから、この辺で寮歌でも歌って散会に致します。

（一）長江の水天をうち
　　万里の流れ海に入る
　　広茫の原江南の
　　起城のほとり桃の里
　　祖国の使命身にうけて
　　集う男子の意気を見よ

（二）双寮三百健男児
　　情熱血の様化なり
　　今落日の愁こめ
　　遠く薤雲の沈む時
　　惨たる東亜の風雲に
　　凄愴の眉あがるかな（以下略）

（一九三九（昭和一四）二月中旬号（「受験旬報」））

なったといえるだろう。

以上のような学生生活の中で最も力を入れた分野についての回答を第一〇表にまとめた。

それによると、最も力を入れたのはクラブ活動と語学、それに勉学という三本柱が浮かび上がる。クラブ活動はほとんど全員が参加し、とくにスポーツ系には力が入ったという。柔道、剣道、硬式庭球、軟式庭球、野球、蹴球、弓道、角力、端艇、水泳、卓球、陸上競技、籃球、ラグビー、講演、学芸、音楽、その他のクラブがあり、スポーツクラブの中には上海だけでなく、内地までも遠征し対抗戦に参加し好成績をあげるケースもあった。

語学はいうまでもなく中国語、前述したように教室だけでなく、寮生活の中でもトレーニングが行なわれた。また勉学では三四期生にそのウェイトが低いが、卒業年次に日中戦争があり、「大旅行」は中断し、長崎の仮校舎へ移転し、「大旅行」の報告書をまとめるチャンスを失ったことが反映したものと思われる。また四五、四六期生は予科も専門部も勉学のウェイトが低いが、戦争激化の中で授業を受けるチャンスが激減したことのあらわれであり、「力を入れられず残念」という回答も八人みられたことがそれを裏付けている。

そのほか、それぞれ数はそれほど多くないが他の多くの面に力を注いだ様子も浮かび上がり、書院生活で各人が青春を謳歌したといえる。

そのような書院生活の中で書院の教育の特徴がどの点にあったのかの回答をまとめたのが第一一表である。

それによれば、最も多いのは「自由」であり、束縛され

第10表　入学後力を入れた分野（複数回答含む）

内容	期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
									予科	専門	予科	専門	予科	専門	
クラブ活動	9	7	8	12	10	13	20	8	15	5	6	9			122
語学	7	4	5	10	4	6	5	6	14	9	5	14	8	3	100
勉学	14	1	6	8	5	5	11	9	12	5	3	2	2	2	85
中国、中国人研究	2	1	2	2	1	1	2			1	1	1		1	15
政治、思想、哲学			3			3	2	1	2		2	2			15
文学、読書						3	1		1	1	1	1			8
学芸部、学友会	2	1	1	1		1	2		1						9
中国人学生とのつきあい			1			1					1				3
日中関係							1		1			1			3
語らい、友を得る				1			1			1					3
飲酒					1	1		1				1			4
勤労奉仕												2			2
入れられず残念												4	3	1	8
その他	4	1	1							1		2			9
なし	1	1	2	2	2	3		1	2		2	2			18
合計	39	16	29	36	23	37	45	26	48	23	21	41	13	7	404

（1995年アンケートより作成）

第11表　書院教育の特色について

内　容	期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
									予科	専門	予科	専門	予科	専門	
語学教育	6		3	3	2	7	3	4	3	3	2	7	5	1	49
自由	7	4	12	7		8	4	2	5	2	2	5		2	60
全寮制、上下級生一体	2		2	3	2	3	3	1	1	3	3			2	25
人格形成、人間教育	2	2	3	2	2	3	5		1		2	1			23
実用教育	1	1		3	3	3	4	3	1			3			22
教師と学生との交流	2	1	1		1	2	1		1	1		1	3	1	15
広い視野			5	1			2				1				9
自主性			4				1	2	1			1	1		10
進学精神	1	2			1			1			1	2			8
すぐれた教師	4				1	1	1		1	1		1			10
アカデミック							2	1	2						5
中国理解	1				1	2		1							5
日中友好人材養成	1				1	1	1								4
高商教育	1		1				1					1	1		5
徳育、知行一致			1				4		1				1		7
中国の実地体験			3								1				4
きびしさ	2		1							1	1		1		6
不十分	2			3		1			2		1	1			10
その他	8	3		6	2	1	3	2	3	1	2	1	1		33
わからない、不明	1		1	1	1	1		1	2		4	2		1	15
合　計	41	13	37	29	17	33	35	18	24	12	20	26	13	7	325

（1995年アンケートより作成）

第12表　書院教育のよかった点

内　容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
先輩が後輩に教える中国語	10	6	4	8	9	7	3	8	6	8		6	7	8	2	92
全寮制教育	3	6	6	11	10	4	10	8	5	8	6	1	3	2		83
日中アジア親善	1			3	2	1	2		2	2	1		2			16
現地での実地教育	1			3	3	1	4	3			3		3			21
大旅行	2	2			1		1	3	2							11
自由と自治	1				1	1	3	2	1		1	3	2			15
教師と学生の交流	1	1			3	3	4	4	1	1		2	2	1		23
進学精神教育		2		4				2		2	1	1				12
精神教育、礼儀	2		1	5	2				1		1					12
人間形成、知育と徳育			1			1	1	1		2			1			7
実学教育							1	2	2	1		1	3			10
少人数教育					1		1			2						4
歴史、地理、文学教育					1			2				1				4
国際人養成				1				2				1				4
その他	1	3						2						1		7
合　計	22	20	12	35	33	18	30	39	20	26	13	16	23	12	2	321

（1995年アンケートより作成）

ず自由に勉学に打ち込めたことがあらわれている。それは「自主性」や「広い視野」とも関係する。戦時色が濃厚になると、内地では軍国主義下での出版・言論の規制が厳しくなり、大学から追放された教師も出るほどであった。しかし、書院は文部省の管轄ではなく外部省の管轄であったことや内地でなく国際都市上海にあったことが幸いして、学問や思想の自由がみられた。市内の書店では内地で発禁本になっていた社会主義関係の書物も自由に手に入った。そんな中で学内に社会主義運動に関心をもつグループもあり、一九三〇年と一九三三年には学生が検挙される事件が生じている。

次いで「語学教育」が多いが、これに「実用教育」を加えると、実用的語学教育が書院教育を最も代表することになる。授業時間も中国語教育に多くが充当され、書院の中国語教育はよく知られた特色であった。

また「上下級生の一体性」、「人格・人間教育」、「教師と学生との交流」などの回答はもう一つの書院教育の特色であったことが知られる。とくに「教師と学生との交流」については、学生はもちろん、教師も同一キャンパス内に生活しており、教室外でも日常的に学生との接点があったことをあらわしている。

第一二表は以上のような書院教育の中で、そのすぐれた点についての回答をまとめたもの。それによると、圧倒的に全寮制による教育とそれをベースにした上級生が下級生に教育する中国語発音と中国語教育のシステムを評価している。それは今日の大学教育では完全に欠落したシステムであり、その分、書院教育の特色が浮かび上ってくる。それはまた書院生の同窓意識を強めることにもなった。

その他では「大旅行」やそれを指すと思われる「実地教育」もあわせて大きな特色として認識されている。また、第一一表中でも大きな比率を占めた「人格形成」、「教師と学生との交流」、「精神教育」、「建学精神」など人間関係にかかわる教育への評価もあわせると五〇件をこえ、これも高く評価された書院教育の一つとして評価されたといえる。

以上のように書院教育にはいくつかの特色があり、それがそのまま書院教育のすぐれた点としても評価されていることが明らかになった。概していえば、この時期の書院のキャンパスもすぐれていたが、それ以上にそこで工夫され展開された教育システムが高く評価されたと言える。

ところで、このような教育システムの根底には荒尾精から根津一の手によって生み出され継承された建学の精神があり、それに東亜同文会の主旨も加わり、それがそのような教育システムと密接な関係をもっていたといえる。前掲第一一、一二表の書院教育の特色やそのすぐれた点に関する回答の中にも「建学の精神」が挙げられている。とくに第一一表では、それに関する「精神教育と礼儀」、「人間教育、知育と徳育」、「日中アジアの親善」などの回答を加えると七〇件ほどになり、書院教育の大きな柱となり、それが評価されていたことを確認することができる。

それは全体としてまとめれば「書院精神」ということで表現出来、建学の精神をあらわしていると言ってよい。

そこで第一三表ではその建学の精神である「書院の精神」についての具体的内容をどのように理解されていたか

第13表 「書院精神」とは

内容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
日中提携	7	6	3	22	8	8	12	8	4	9	5	5	7	3	2	109
アジアを興す	2	3	2	4	1	7	5	8	4	4	1		2		1	44
中国、アジアへの理解	1	2		2		1	3	2		2		2	1	1		17
人格形成と礼儀	2	3	4	2	2	2	4	1			2	1	2	1		26
奉仕の精神				2			2	1	1	1			2			9
自由と寛容				1			1	2			1		1			6
ヒューマニズム										4						4
和と団結	1						1	1	1	1	1					6
根津・王道精神							2									2
近衛精神	1		1													2
国際人養成	2		1						1				1	2		7
独善										1			1		1	3
院歌の精神						1									1	2
パイオニア信								2					2			4
自路													2	2		4
日本の進						1				2				1		4
そのほか	2			2	1			2		1	1	1			1	11
わからない	1	1		2	1		1		3	6	1	4	2	1	2	25
無記入	7	1	3	7	3	3	2	1	3	6	2	4	5	1		48
合計	26	16	14	44	16	23	33	28	17	37	14	17	28	12	8	333

（1995年アンケートより作成）

についての回答をまとめた。

それによれば、圧倒的多数を占めるのが、「日中提携」であり、それに「アジアを興す」、「中国アジアへの理解」を加えると全体の回答数の過半を占める。そこに建学の精神、建学の目的が理解された形で表現されているといってよい。また、「人格形成と礼儀」、「奉仕の精神」、「自由と寛容」、「和と団結」、「根津の王道精神」などにあらわされる精神教育は教育方法としてのもう一つの書院精神として理解されていることがわかる。

書院の建学精神は「興学要旨」と「立教綱領」に示されたもの[10]。うち「興学要旨」は建学の精神をあらわし、

「中外ノ実学ヲ講シテ、中日ノ英才ヲ教エ、一ニハ以テ中国富教ノ基ヲ樹テ、二ニハ以テ中日輔協ノ根ヲ固ム。期スル所ハ中国ヲ保全シテ、東亜久安ノ策ヲ定メ、宇内永和ノ計ヲ立ツルニ在リ」

と示している。

当時の混乱と混迷する隣国中国に対する日中提携による安定化をめざそうとする主旨であり、回答の中で圧倒的多数を占めた「日中提携」はこの建学の精神を見事に汲み理解していたものといえる。

また、「立教要綱」は、

「徳教ヲ経ト為シ、聖経賢伝ニ拠リテ之ヲ施シ、智育ヲ緯ト為シ、特ニ中国学生ニ授クルニハ日本ノ言語文章、泰西ノ百科実用ノ学ヲ以テシ、日本学生ニハ中英ノ言語文章及ビ中外ノ制度律令、商工務ノ要ヲ以テス。期スル所ハ、各自ニ通達強立シ、国家有用ノ士、当世必需ノオト成ルニ在ル」

と示し、具体的な教育方法が儒学をベースにして述べられている。

この「興学要旨」と「立教綱要」はそれぞれ、建学目的とそれを実現するための教育方法を明示しており、両者をあわせることによって書院教育の根幹をなすというすぐれた構成になっている。そこにも書院教育の実践性が十分に読みとれる。

今日の日本の大学が抽象化された建学の精神を唱えても、そのための具体的な教育方法を打ち出せない状況が大学教育をあいまいにさせていることからみれば、書院の掲げた教育目的と方法は、時代性があったとはいえ今日再評価されるべき存在であったということができそうである。

アンケートによる回答は、以上の目的と方法の二つからなる書院精神を的確に表現しており、書院生の多くがこの建学精神と教育方法を書院教育の中で理解していたことを示しているといってよい。

(二) 中国語教育

以上のような書院教育の目的の中で、中国語教育は当然必要不可欠な存在であった。それは前掲第一一表の書院教育の特色の中でも、また第一二表の書院教育のすぐれた点の中でも多くの書院生が同意した点である。

第一四表は書院における中国語教育のすぐれた点についての回答をまとめたもの。多くの項目が並ぶがそれだけ中国語教育の内容が多彩でもあったといえる。

そのうち最も多いのは、「寮の中での上級生が新入生に

第14表　書院における中国語教育のすぐれている点

内容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44 予科	44 専門	45 予科	45 専門	46 予科	46 専門	合計
寮内で上級生による発音練習	3	1	3	1	6	2	1	5	4	5	2	5	4	4		46
発音教育	2	2	4	2	3	4	3	7		5	1	1	3		1	38
実用会話	3	1	1	2	8	2	6	8	2	3		2	2	1		41
実地で習得	1	2	1	2	3	3	5	5	4	3	1	1	2		2	35
中国人と日本人共教師の授業	3	1	2	3	3	1	5	3	1	1	2		3			28
中国人教師によるマンツーマン授業				2	1	3	3	1	1	3	1		1	1	1	18
すぐれた教師	1	1		1	1	1	1	2				1	1			10
語学授業時間が多い		1					1	1	4		1		1			9
テキストの丸暗記		1			1			1			1		2	1		7
反復効果				1		1							1			3
十分な基礎力							1				1	1				3
文法と速読	1						1						1			3
完成された体系のテキスト	2		1			1									1	5
北京官話に徹した							1									1
学生による気を与える			1												1	2
意見なし					1	1				1		3		2	2	10
無記入	9	2	2		5	4	3	1	4	6	5	3	3	5		52
合計	25	12	15	14	32	23	31	34	20	27	15	17	24	14	8	311

(1995年アンケートより作成)

行なう発音中心の教育」である。それは「発音教育」を加えると大きなウェイトを占める。中国語の発音には日本の音にない音も多く、発音時に動かす口の運動量も大きい。しかも四声とその変化という日本語ではなじみのない領域が多く、それだけに日本人にとって発音は重要な中国語教育の基礎であった。

また、それに関連して中国語の授業時間が多く、しかも中国人と日本人の両方の教師が同じ授業の中で教育するユニークな方法が採用されていたことも好評であったことがわかる。そのさい、中国語教師による発音中心のマンツーマンの授業も評価される点として挙げられており、その他の回答も含めると、中国語の教育方法に色々な工夫のなされていたことがわかる。

また、上位の評価を受けている「実用会話」と「実地での習得」は、書院教育がめざす日中間の貿易実務者養成にとって重要であった。そのためのテキストである『華語萃編』はそのような実用的会話をベースにして編集され、生きた中国語会話のテキストとして改訂されつつ書院生専用テキストとして完成された教科書へと発展した。

このテキストの中には、後述する「大旅行」のさいに用いる知事への挨拶文など、「大旅行」で実践できる実用会話も含まれ、全体としての書院教育のカリキュラムに沿った編集がなされていたともいえる。

書院が上海にあった点、書院の外で生の中国語にふれることが出来たのもメリットであったことが回答からもわかる。ただし、書院で学ぶ中国語は北京官話であり、上海では上海語が用いられ、書院生達は週末に外出するさいには

第15表　中国語学習

内容		明～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
書院在学中の中国語のマスター状況	マスターできた	5	1	6	3	5		2	1	2	2				1	28
	まずまず	20	9	20	14	7	10	12	1	4	2	1	6			106
	なんとか	8	4	15	9	7	8	10	6	7	10	3	5	1	2	95
	一部だけ	4		2	6	2	8	5	11	16	3	9	15	6	3	90
	できなかった	3		2	3	1	4	1		3	2	5	3	7	3	33
	不明	1		2	3	2	1	3	3	2		1	1	1	2	22
	合計	41	15	45	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	378
現在、中国語の勉強を	している	10	2	6	8	8	11	7	6	11	6	2	9	6	3	95
	時々	11	7	15	16	5	8	14	6	6	8	6	4	4		110
	あまりしない	2	3	10	3	4	6	7	4	11	3	5	7	3	4	72
	しない	15	2	12	10	6	6	3	4	6	2	6	7	2	3	84
	不明	3		2	1	1		2	2			2	3		1	17
	合計	41	15	45	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	378

（1995年アンケートより作成）

上海語も実践の中で身につけ、そのような方言への対応が、「大旅行」のさい各地の方言に接した時の応用力にもなったともいう。

このような中国語教育で、中国語をどの程度までマスターできたと自己評価したのであろうか。その回答を示したのが第一五表である。同表には現段階での中国語との接点についてもあわせて示した。

まず、書院での中国語のマスター状況は「まずまず」、「なんとか」、「一部だけ」というレベルが中心になっている。その中では書院生時代の方がマスターしたレベルが高く、書院生時代の中国語教育がより徹底して行なわれたことがうかがわれる。それに対して書院大学生時代になると自己評価のレベルはやや下がっている。大学への昇格が教育内容を改変したこと、そしてそれ以上に戦時下で授業が次第に不十分になっていった外部環境の影響によるものであろう。

一方、「できなかった」という回答もみられる。これまで筆者の卒業生との面接のさいにも、「どうしても中国語が合わない」学生もいたという話を聞いたことがあり、また諸般の事情で授業を十分受けられなかった理由もあったという。

同表の下半分は、現在における中国語との接点の回答分を示したもの。全体としては今日なお中国語に関心をもち、中国語を勉強している卒業生が過半を占め、そこに書院教育の成果と、また卒業後も中国とかかわった卒業生の方々の気持が十分にあらわれているとみてよい。この後半の部分については、本報告の後半で関連的にふれる。

六、「大旅行」をめぐって

書院教育の中で「大旅行」行事も大きな特色であった。そこでここでは章を独立させてアンケートに従ってその回答内容をみてみる。

前述したように、書院の「大旅行」は一九〇五年（明治三八年）に入学した五期生がその最終学年（三年生）の時から本格的に始まった。

その発端は上海や漢口などの都市での商業慣行調査や青島、天津、北京などへの修学旅行にあった。しかし、書院生の中にはもっと広く中国を見聞したいという熱意をもって休暇中に数人で各地を旅行する者もあらわれ、次第にそのような書院生の熱望が高まった。しかし、それには多くの経費を必要とし、開学当初の書院にはそのような資金はなかった。それを打破したのが二期生林出賢次郎、波多野ら五人の卒業直後の西域への調査旅行であった。折からの日英同盟下、日露関係の緊張下で西域への露国勢力の浸透状況に関する英国からの外務省への調査依頼を根津院長が受け、それを五人へ託したものである。それは二年間に及ぶ辛苦の旅であり[11]、その成功が書院生に刺激を与え、外務省からの報償とのちの助成金が「大旅行」を可能にした。

「大旅行」は最終学年の最大行事として恒例化し、各年各班が作成する調査報告書は『支那省別全誌』[12]や『新修支那省別全誌』[13]の貴重な資料ともなり、それをベースにして「支那研究部」としての中国に関する研究所とその研究紀

要である「支那研究」も創刊され、それが書院のアカデミックな体制を生み出していく契機にもなった。

毎年、数人から七、八人の班が一〇班から二〇班結成され、中国各地へ散った。五、六月に出発し、夏季休暇中も利用する三ヵ月ほどのまさに徒歩による中国大地を歩く旅であった。そしてそれを通しての調査報告書が各テーマにしたがって手書きで作成された。

この二〇世紀前半期の中国は、とりわけ民国期以降は軍閥による内戦とその社会的混乱の中から派生した土匪の出没する治安の悪い危険な状況にあった。そんな中を書院生は自ら計画立案したプランにしたがい文学道り冒険旅行をすすめ、中には内乱に巻き込まれたり、土匪に遭遇して身ぐるみ剥がされたりした危険なケースもあったが、約四千人余りが参加し、七〇〇コースにも及んだこの伝統化された「大旅行」での死者は一人も出ないという奇蹟に近い状況もあった。ただし、書院大学時代に設けられた専部門の一九四四年（昭和一九年）の「大旅行」で一人が包頭付近で敵襲を受け死亡する事件が生じている。とはいえ、全体としては班構成による方法と独自の探検隊スタイルで確立された「大旅行」は先輩から継承されたノウハウの中でまぎれもなく奇蹟に近い順調な成功と成果をあげたということが出来る。それは当時の中国における調査旅行の在り方を示したものともいえた。

この大旅行が書院生に大きな夢をふくらませたことは間違いない。

第一六表はこの「大旅行」への期待内容についての回答をまとめたものである。

長中では書院大学時代二年目の四一期生までしか示していないが、「大旅行」は大学昇格とともにゼミ単位へと編成され、ゼミテーマにしたがった調査目的と調査方法をとることになり、四〇期以降はその内容が変化する。満州事変後は中国政府のビザが出ず、また日中戦争が始まると「大旅行」コースは日本軍の占領地域へ縮少せざるをえなくなり、かつて危険地帯は中国兵が護衛までしてくれた長距離の旅行コースはほとんど出来なくなったためである。すでにその影響は満州事変後の二九期生や三〇期生、三一期生の「大旅行」にもあらわれ、日中間の緊張の中で調査地域のほとんどは満州に限られ、「大旅行」を夢見ていた書院生を戸惑わせた。三四期生は「大旅行」の途中で蘆溝橋事件が生じ、旅行の中断を余儀なくされ、以降、「大旅行」のコースは沿岸部などに限られ大幅に縮少され「大旅行」の体をなさなくなっていく。したがって、四〇期の「大旅行」は書院時代の三九期に当る留年生とともに沿岸地域のコースに限られ、ゼミ担当教授が指導、四一期は長江デルタ地帯の調査で実質的に終焉を迎えている。ただし、四四期の専門部は「大旅行」の復活をめざし、沿岸部や内蒙古方面に出発するが、前述したような死亡事故が生じ、これが事実上の「大旅行」の終りとなった。

以上のような二九期以降の「大旅行」をめぐる環境の変化の中で、それでもなお書院生の「大旅行」への期待感は大きかった。同表によれば、「現地の人々との直接交流」や「大陸をより広く知りたい」、「中国の実態をもっとよく知りたい」とする願望が強くあらわれ、その期待感がふくらんでいたのに対し、その一方では、三五期以降みられるよ

第16表 「大旅行」への期待

内　容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
現地の人々と直接交流	6	4	3	6	7	2	6	34
中国の実践をより深く知る	3		3	4	4	2	1	17
大陸雄飛の夢と冒険	3			2			3	8
大陸をより広く知りたい	4	1	3	5	2	1	11	27
未知へのあこがれ				5	1		1	7
北京語がどこまで通用するか			1		1	1		3
方言を知りたい			1			1		2
期待と不安				2	2	1		5
戦時下で希望コースが実現できるのか				2	2	1	6	11
仲間意識を育てたい					1			1
自由に動きたい							1	1
東南アジアへ行きたい					1			1
満州への期待					1			1
これで書院生になれる					1			1
その他					1			1
義務感					1		1	2
あまり期待せず	1	3		2	4	1	2	13
無記入	8	1	5	20	7	3	1	45
合計	25	9	16	48	36	13	33	180

（1995年アンケートより作成）

うに、時局の変化の中での旅行コースの縮少化の中で、希望するコースが果して実現出来るのかどうかという不安感を示す回答もみられ、この時期の書院生の「大旅行」への期待と不安の交錯した状況がうかがわれる。

コラム16とコラム17は当時の「受験旬報」に掲載されたそれぞれ三五期生と三六期生の「大旅行」実施を伝える記事である。いずれも制約された状況下で精一杯のコースを確保しようとした「大旅行」であった。

では具体的に「大旅行」はどのように行なわれたのであ

〈コラム16〉

同文書院ニュース

書院生は、十三万坪の広大な敷地を占める新校舎で、大陸的雰囲気に浸りながら日々勉強にいそしんでいるが、四年生百余名は六月初旬から三ヶ月に亘って南洋、中支、北支占領地区、蒙疆、満洲と各班に別れて実地見学旅行をしていたが、九月初旬全部無事帰校した。

就職状況はと言うと、明年度の卒業生に対して既に四倍以上の申込があり、その主なものは三井物産、三菱商事、住友、大倉商事、満鉄、伊藤忠、三菱重工業、日銀、鮮銀、台銀、横浜正金、満洲中央銀行、満洲興業銀行、蒙疆銀行等八十有余社に上っている。

（一九三八（昭十三）十一月上旬号（「受験旬報」））

〈コラム17〉

東亜同文ニュース

新四年生がこの六月から行う恒例の大旅行に関しては、既に約一ヶ月前から準備委員及担任教授諸氏と種々計画中であったが、本年は特に東西文化研究所からの調査依頼もあり慎重に案を練っていたが、一班は三人から五人を以て組織、各班にて一省又は一都市及その附近を担当調査することに決し、南洋四班、広東二班、香港二班、中支十三班、北支十四班計二十五班の旅行線を構成することに確定した。割当の決った各班では夫々張切って準備に努めている。

（一九三九（昭十四）三月中旬号（「受験旬報」））

第17表 「大旅行」コース選定の理由

内　容	期～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
テーマによる	5	3	1	6	3	6	7	31
行きたい地域を選ぶ		3	1	8	10	1	3	26
教授や学校の助言、指導		1	5	4		2	2	14
班員の希望による	2			6	4		1	13
排日や戦争でコースが限定された		8	8	1	2	2	2	23
体力と効率上から選ぶ	1				1	1		3
偶然決った					2			2
大体決めていた		2						2
そ　の　他		1	1		1			3
忘　れ　た					2		4	6
無記入、不明	6	5	5	16	8	7	4	51
合　計	14	23	21	41	33	19	23	174

（1995年アンケートより作成）

第18表 「大旅行」による中国への理解内容

内　容	期～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
広　大、雄　大	3	3	6	6	13	6	5	42
大衆の貧しさと苦労	1		1	1	1	2	3	9
大衆のたくましさ、エネルギー		1		7	2			10
得体の知れぬ民族性の奥深さ				2	2		3	7
地域と民族の多様性				3	1		1	5
言語と民族の多様性		1		4		1		6
温和な良民	1	4	1	1		3		10
日中友好への共感		1		2			1	4
文明の地域差	1	1	1					3
未　開　性		2	1	1	1			5
政治的不統一性	4	2			2			8
生活様式と地縁社会	1	1						2
日本の対支政策へ疑問				1				1
満州国は大変		1						1
抗日運動にショック		1			1			2
農村を見る重要性				1			2	3
そ　の　他				1			2	3
理解できてない		1		3	5		4	13
無　記　入	8	4	4	12	6	8	9	51
合　計	19	23	14	45	34	20	30	185

（1995年アンケートより作成）

ろうか。

第一七表は「大旅行」のコースの選定の理由について回答をまとめて示した。同表では満州事変前の二八期生までの欄も設けた。二八期まではかなり自由に「大旅行」を実施でき、コースの制約は伝染病や社会不安（土匪出没）などまだ局地的であった。

それによると、全体としては、「設定した調査テーマ」と「行きたい地域」とが最も多く、かなり自由に調査地域を学生の手で決めることが出来たことを示している。そのさい危険地帯については指導教授の助言などがあり、それによってコースを決定した面もある。一方、二九期生以降では時局の中で「排日運動や戦争でコースが限定された」とする回答も目立つ。とりわけ三四期は「大旅行」中に日中戦争が始まり、「大旅行」を中断せざるをえなかったことから一層その思いが強くあらわれたものということが出来る。

第一八表はこの「大旅行」を通して中国をどのように理解したかという点への回答である。

それによると、全体としては中国の広さを実感したとする回答が最も多く、全期を通じて共通する。「大旅行」はその多くが調査地域を設定しつつもその前後は各地をなるべく見るべく長い旅行コースを設定するケースがほとんどである。日本に比べ大地形が果しなく続く大地を徒歩で巡る時、この広大さは体で実感したに違いない。

次いで旅の途中で出会った中国大衆の人々への感想が目立つ。「貧しさと辛苦」な状況のある一方、そのような中で「たくましく、エネルギッシュ」に働らく大衆も観察している。多くの旅のコースは農村地帯であり、そこで出会った農民達の「温和な良民」を感じた回答も目立つ。食事は自給し、宿は時に農家に泊めてもらう中で、中国農民との接点は多かったことを示している。そんな中で「言語の多様性」を実感し、中国内における「地域差」や「民族の多様性」も実感している。また各地での内戦や土匪の出没などによる治安の悪さは、書院時代の書院生には中国の「政情的不統一性」を感じさせ、より制約された状況下で旅行を行った書院大学時代の書院生や書院時代末期の書院生には「得体の知れぬ民族性」を感じさせたように思われる。

その他、少数ながらさまざまな回答があり、書院生にとってそれぞれが当時の中国のもつ多面性を映しとったとみることが出来る。

そのさい、現地では書院で学んだ中国語とその応用力が発揮できたのであろうか。

第一九表はその回答である。

全体としては「大体通じた」とする回答が約半分を占め、これに「十分通じた」、「どうにか通じた」を加えると、何とか会話で困らずに「大旅行」をつづけることが出来たという状況がうかがえ、あらためて大したものだと言ってよいだろう。三カ月余りの長丁場の中で、多くの地方語と接し、機転をきかしながら旅をすすめた様子がうかがえる。

旅行中、各県に入ると県知事に挨拶し、県内の通行を認めてもらうのが最も重要な事項で、その時に危険地帯は中止勧告されたり、護兵を雇ってくれたりする。多くの知事は北京語がわかり、その基本的部分はクリヤー出来たことは旅行をすすめる上で重要であった。そして時に日本へ留

第19表 「大旅行」中の中国語

内　容	明～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
大体通じた	9	14	6	7	13	11	17	77
十分通じた	3	1	1		2	5	1	13
官吏には十分通じた	1				2			3
どうにか通じた	1	1		2	6		3	13
少し通じた					1		1	2
方言は通じなかった		2	1	2		1		6
専門用語はむつかしかった					3			3
不十分だった	1	1		1	3			6
全く通じなかった					1		1	2
地域による							1	1
筆談も加えた			2	1		1		4
あまり話さなかった				1	2		1	4
無　記　入	6	3	3	3	5	4	5	29
合　計	21	22	13	17	38	22	30	163

（1995年アンケートより作成）

写真B 「大旅行」への旅立ち。

第20表 「大旅行」のよかった点（複数回答含む）

内　容	期～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
見聞を広めた	1	4	3	15	6	2	3	34
現地で先輩からの歓迎	1	6	4	2	7	7	2	29
中国の民情を深く知った		3	2	1	7	1	4	18
新しい経験や体験	1		4				2	7
現地の人々との交流			1	3	1	1	2	8
中国語に自信		2			1	1		4
自信をつけた		1		2				3
中国軍人や警察に保護		1			1		2	4
船　旅	1				1		1	3
とにかくよかった	1				2		1	4
自由で楽だった		1			2			3
各機関が好意的	2							2
危険を感じなかった				1				1
ソ連を見ることができた		1						1
そ　の　他	4	1		1	1			7
とくにない		1		2			3	6
無　記　入	6	3	4	13	8	11	9	54
合　計	17	24	18	40	37	23	29	188

（1995年アンケートより作成）

学した知事達にも出会っている。

それでもやはり「不十分」、「全く通じなかった」、「方言は通じなかった」とするなかなか厳しい状況もあり、中国国内における地方語の多様性がうかがわれる。

第二〇表はこうして体験した「大旅行」がよかった点についての回答をまとめたものである。

それによると、最多の回答は「見聞を広めた」であり、それに関連して「中国の民情を深く知った」、「現地の人々との交流」を加えると、記入回答者の半分を占める。「上海だけに居ては中国はわからない」という実感は書院の中でも「大旅行」を経験した先輩達から色々聞かされていたという。それだけに上海の地を離れ、広く農村部を含めて歩き巡った書院生には文字通り「見聞を広めた」大旅行になったのは当然だったであろう。無記入はともかく、「とくにない」とする回答がわずか六件であることも、このことを十分に裏付けている。

そのほか、「中国語に自信をつけたり」、「大旅行」を完遂したことでの「自信」や本人にとっての全く新しい領域を「経験や体験」した達成感も垣間見ることが出来、後述するように、その後の人生にもこの「大旅行」がもたらした意義は大きかったといえそうである。

また、旅行先の都市で書院の先輩を訪ね、先輩もそれを大歓迎することも大きな喜びであった。この時期になると、先輩が各地に広がって活躍するようになり、先輩の活躍ぶりを見るとともに、先輩から地域情報や調査の世話を受けることもあった。そこに先輩と後輩の強いつながりが見出せる。

第21表 「大旅行」の苦しかった点

内　容	期～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
南京虫、シラミ、ノミ		2	1	4	1		3	11
マラリアなど病気や入院		2	2	4	3			11
コースが制約	1	1	1	3		2		8
旅費不足				1		1	2	4
危険地帯の通過		1		1	3		1	6
軍隊や警察の同行			1		1	1		3
暑熱	1	3		1		2	1	8
寒冷		1						1
サソリ、砂塵					1			1
言葉が通じない					1		2	3
食料が不足		2		2				4
宿舎なし、不潔		1		3				4
現地で相手にされず							1	1
道の悪さ		1					1	2
忍耐の限界	2			1				3
戦争への疑問							1	1
その他		2			1			3
困った点はなかった	1	5	5	6	1	4	3	25
無記入	5	8	5	21	5	9	17	70
合　計	10	29	15	47	17	19	32	169

（1995年アンケートより作成）

しかし、一方ではこの「大旅行」中の苦しかった経験もあった筈である。

第二一表はその回答を示したものである。

それによると「大旅行」のよかった点に比べ、回答内容はかなりバラツキがみられる。これはコースが多方面にわたり、それぞれのコース事情が反映したものとみることが出来る。その中では「マラリア」や「ノミ、シラミ、南京虫」など不潔な宿や農家の土間などの環境に閉口したこと、現地での体調を崩した点が目立つ。とくに「大旅行」中の五、六月から八月は秦嶺山脈以南はモンスーンの時期に当り、華南や華中の旅は降水に見舞われ、泥土の道や暑熱による体調の悪化に悩まされるケースが多かった。また、予定したコースが多くの土匪の出没や伝染病の慢延によって中止せざるをえず、全く準備が出来ていないコースへの変更を余儀なくされるケースもあり、それらが「コースの制約」という回答に集約されている。全体として「大旅行」のよかった点の方が多くを数えたことは、この「大旅行」がそのような苦労をふまえてもなお有意義であったことが伝わってくる。

以上のように大きな期待の中で参加した「大旅行」によって書院生はそれぞれどのような中国理解をしたのであろうか。それをキーワードとして簡単な用語で回答してもらったのをまとめたのが第二二表である。

同表では対象を伝統的な「大旅行」を実践してきた書院時代の三八期生までの回答だけを取り上げた。また調査コースによって華北、華中、華南と内陸奥地、それに満州・蒙古方面別に分けて整理して示した。キーワードはまとめ

第22表　20期から38期までの調査旅行コース先別中国理解のキーワード

（数字は入学年期を示す）

華北方面	華中方面	華南方面
26 政治不統一、強い地縁	22 雄大	20 内戦なければ平和な民
26 広大、良民	23 農村生活を知る	27 統一の困難性
29 通貨の多様性	33 たくましい人々	32 東洋人の親近感
32 広大	33 内戦の泥沼化	32 対日に中国理解できず
33 都市交通は至便	33 農民のやさしさ	34 広大
35 遅れた状態	34 底深い民族性	34 日本の小さいこと
35 人々の苦しみ、悩み	34 広大、大衆の人のよさ	34 広大
36 南北差	34 広大	34 原始的貧しさ
37 広大	34 文明からの遅れ	34 日本の明治維新期
38 長い歴史	35 理解できず	35 華僑の活躍
38 偉大	35 広大、心の広さ	35 言葉の多様さ
	35 恐ろしい国	36 百聞は一見にしかず
	35 親しみやすさ	36 偉大さ
	35 言葉の多様性	36 日本の対支政策へ疑問
	35 偉大な国	36 強い生活力
	36 広大、人情あり	36 人々のエネルギー
	36 理解できず	37 広大
	36 地域の姿を知る	37 まとまりを欠く
	37 広大	37 親切
	37 教育なき民衆	37 広大
	38 まとまりを欠く	37 広大
	38 日本との相違	38 広大
	38 とらえどころなし	38 方言の多さ
	38 愛着	
	38 親愛と信頼	
	38 日貨排斥	
	38 多民族	
	38 生命力	
	38 つかみにくさ	
満州・蒙古方面	**内陸方面**	
25 軍閥抗争目立つ	23 文明の地域差	
28 広大さ	31 広大、不統一	
29 未開発の国	33 統治の実態を知る	
29 生活様式を知る	34 広大	
29 通貨の多様性	37 地大物博	
30 五族協和、日中友好		
30「満州国」も大変だ		
31 未開だが平和		
32 見聞広がる		
35 広大		
35 広大		
38 潜在力		

（1995年アンケートより作成）

てカウントせず、記入された用語を一部要約しながらまとめた。

それによれば、どの地域についても土地の広大さと政治的不統一による社会の乱れが観察され、二〇期代がまだ平穏さを残す状況を伝えているのに対し、三〇期代は緊張感を伝え、満州事変や日中戦争の影が読みとれる。

地域的にみると華中へのコースが多いせいもあるが、観察し理解した内容もかなり多様であり、それは華中がまたそれだけ変化に富んだ地域であることを物語っている。そのため戸惑をかくせないキーワードも散見する一方、より多くの人々と交流したことで中国民衆に愛着を寄せるキーワードもあり、その揺れの幅は大きい。次いで華南のキーワードが多いが、華南一帯から華僑まで当時日貨排斥運動があり、また孫文による革新運動の動きが広がっていたせいか、華中にみられるような親しみのもてることを示すキーワードは少い。書院生はここでは観察者としての立場に留っているといえそうである。華北は広さを示すキーワードを除くとキーワードにまとまりがみられない。北京や天津のような大都市調査の班員と、包頭や張家口のような周辺部を巡った班員との間にみられるギャップの大きさが示されたものということができる。

また満州・蒙古ではそれぞれのキーワードが当時の状況を的確に示しているといってよい。満州における「五族協和」と「満州国は大変だ」という見方の両面が当時のこの地域に存在していたことは十分にうなずける。内陸部については回答数が少いが、それぞれのキーワードが内陸部のもつ特性を示しているとみてよい。

それぞれの回答者は各地域の中でそれぞれ大地を歩き巡った経験者である。個別性があるとはいえ、キーワードとして集約されたこれらの言葉の中に「大旅行」の中でつかんだ眼があり、これらの地域毎のキーワードはそれぞれ各地域のもつ特性をさまざまな観察と経験の中で把握した表現であり、全体としてはさらに中国全体を示すキーワードにもなる。その点でも戦前期における中国理解へのアクセスとして文字通り重要な鍵を与えてくれそうである。

ところで「大旅行」を行った書院生は、帰校後調査目的とした調査報告書を各テーマにしたがってまとめ、卒業論文として書院へ提出した。また途中からあわせて調査旅行日誌も提出している。調査報告書は現地観察や現地での入手資料をもとに作成され、その内容は商取引のみならず、広く地理、歴史、経済、社会、教育の分野へも広がっているし、また日誌はコース上の観察日誌である。筆者はそのうち生き生きと描かれた日誌に注目し、これまでこの日誌を活字化して出版した[12]。いずれの作品もすぐれており、二〇世紀前半期の中国を今後理解する上で重要な役割を担うことが予想される。

そのさい、報告書の作成に当っては、カーボン紙による複写も作成された。複写分は東亜同文会や外務省などへ送られたためだが、その中に参謀本部への送付用複写があったかどうかがしばしば問題にされてきた。もし参謀本部へ送られていたら、書院生の成果は何らかの形で参謀本部で利用されたかもしれず、そうなれば、戦後の日本で流言された書院の性格論にまで影響するのではないかという考え方があるためである。

第23表 「大旅行」の日誌、報告書の複写部数

内　容	期～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
1　部（正本）		3	（提出せず）	3	8	5	（提出せず）	19
2　部	3	2		3	3	3		14
3　部	1	4		8	4			17
4 ～ 5部	2	1						3
6 ～ 7部		1						1
無　記　入	12	13		34	23	14		96
合　計	18	24		48	38	22		150

（1995年アンケートより作成）

第24表 「大旅行」のその後の人生への影響

内　容	期～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	合計
自信がついた	1	1	1	5	4		1	13
苦難を乗り越えられる	1	1		2	1			5
チャレンジ精神		2		2	2			6
中国への親しみ			5	1			3	9
中国人に接し知った		1	1	3	1			6
中国人への理解	1						1	2
もっと中国語を勉強	2				1			3
広い視野			1	2		2	2	7
人生も旅行				1	1	1	1	4
協調性	1	1			1			3
体力の限界を知る	2			1	1			4
友を得た	1		1		4		2	8
就職先		2		1				3
判断力、考え方		2	1					3
外国旅行の楽しさ				2	1	2		5
自主性				2				2
安堵感				2				2
とくにはない		2	2	4	4	4	4	20
無　記　入	7	14	5	19	12	10	13	80
合　計	16	26	17	47	33	19	27	185

（1995年アンケートより作成）

そこでアンケートではこの報告書の作成時に何部複本を作ったかという設問も加えた。その回答が第二三表である。かなり以前の件であり、記憶にない方も多く、記憶にある方のみが回答されたとみてよい。

それによると、最も多いのは正本としての一部だけという回答が最も多い。次いで三部、二部である。中には四～五部、六～七部という回答もあるが、これだけの部数をカーボン紙で複写するにはかなりの筆圧が必要であり、また同期の間でもこれだけの差があったことは考えにくいことでもある。

しかし、この表の傾向からいえば、書院へ提出する正本用と経営母体の東亜同文会用、この東亜同文会へ助成金を出していた外務省用の計三部については書院生の作成した可能性が高いが、それ以外については、部分的にはありえたかも知れないが、このアンケートから判断する限り、参謀本部用まで書院生が作成したことはほとんどなかったものと思われる。それでももしあったとすれば書院生の手ではなく他のルートであろう。

ついでに言えば、「大旅行」のコースやテーマのほとんどは前述したように書院生が自由に決めたケースがほとんどであり、そこには参謀本部の意図が入っていないことはこれまでのアンケートから明らかである。とくに書院時代の「大旅行」はそうである。書院大学時代末期には清郷工作に参加したケースがあるとされるが、この場合はすでに「大旅行」とは異質のものであり、それを「大旅行」とみなすことはできない。いずれにせよ、以上のような中でテーマと調査報告書の内容は次第にアカデミック性を高めており、軍用あるいは戦略用だけの調査旅行とみなすのはかなり一面的な考えだといえる。

この「大旅行」は書院生の胸の中に厚く刻み込まれ、院歌の中ではそのロマンが歌い込まれている。それだけに三カ月に及ぶ徒歩を中心として中国の大地を巡ったこの「大旅行」の経験がその後の人生にも影響を与えたのではないかと思われる。その点についての回答が第二四表である。

それによると、それぞれのその後の人生の中で、この「大旅行」の経験が生きているといってよい。その中で比較的目につくのは、「自信」、「苦難を乗り越えられる」（自信）、「チャレンジ精神」（がついた）に表現され集約されている人生への自信を与えてくれたという影響である。それらは調査旅行日誌を読む中で十分に共感できる点である。

また、「中国への親しみ」、「中国人に接し知った」、「中国人への理解」、「もっと中国語を勉強」という表現に集約される中国への親密感も目立つ。この「大旅行」で初めて上海以外の中国を知り、そこに出会った中国の人々への共感が新たな観点として得られたことが読みとれる。書院時代の書院生は都市ではなく地方の出身者が多く、そのことも中国農村を多く巡った「大旅行」の中で中国人に共感できる面が多かったようにも思われる。

その他の回答内容はそれぞれ個別的であるが、苦楽を共にした同行者同士で人生の「友を得た」り、異った世界を中国に見て「広い視野」を得たとする回答もやや目立つ。

以上のように「大旅行」はその内容の多様性と新しい世界へ身を自ら置いた経験により、それが書院生のその後の人生にとって多様な形で影響を与えてきたことがわかる。そしてそこにもまた書院教育の方法の成果を見出すことができると言ってよいだろう。

七、卒業後の就業と書院の閉学

(一) 就業

以上のように書院で多彩な学業生活を送ったあと、多くの卒業生は中国大陸や朝鮮、台湾で就職した。それは書院入学時に大陸で就業し、大陸で雄飛したいと願った夢の実現でもあった。

第三図は一期から三七期までの卒業生のうち、中国を中心に外地で就業し生活をする卒業生の都市・地区別の分布図である。地名が見出せなかった若干の卒業生については分布図上に表現出来ていないことを断っておく。

それによると、母校の上海を中心に中国本土では華北に多く、その西限は包頭や山西省の運城まで、華中は漢口とその周辺で、西安は皆無である。実際、西安を訪れた「大旅行」の班はそこでは先輩に会ってくろぐチャンスがなかった。また華南では沿岸都市に分散している。このような状態はそのまま当時の日本企業の中国での進出状況も示しているといってよい。

一方、満州も新京を中心に主要都市や鉱山の町にかなり多くの書院生が就職している。これは新生満州国の誕生にかかわるケースが多く、中国語のわかる書院生は満州国が誕生するやその政府要員として採用されたり、満鉄や鉱山会社に引く手あまたの状態で採用された。その点では、日本経済の中国進出を現地で支えたということはできる。

このように、この時点で一千人を越える書院の卒業生が中国や満州で職を得て活躍し、日本内地で就職した書院生の数を上回っていた。

では中国でどのような職種に就職したのであろうか。第二五表はその回答をまとめたものである。

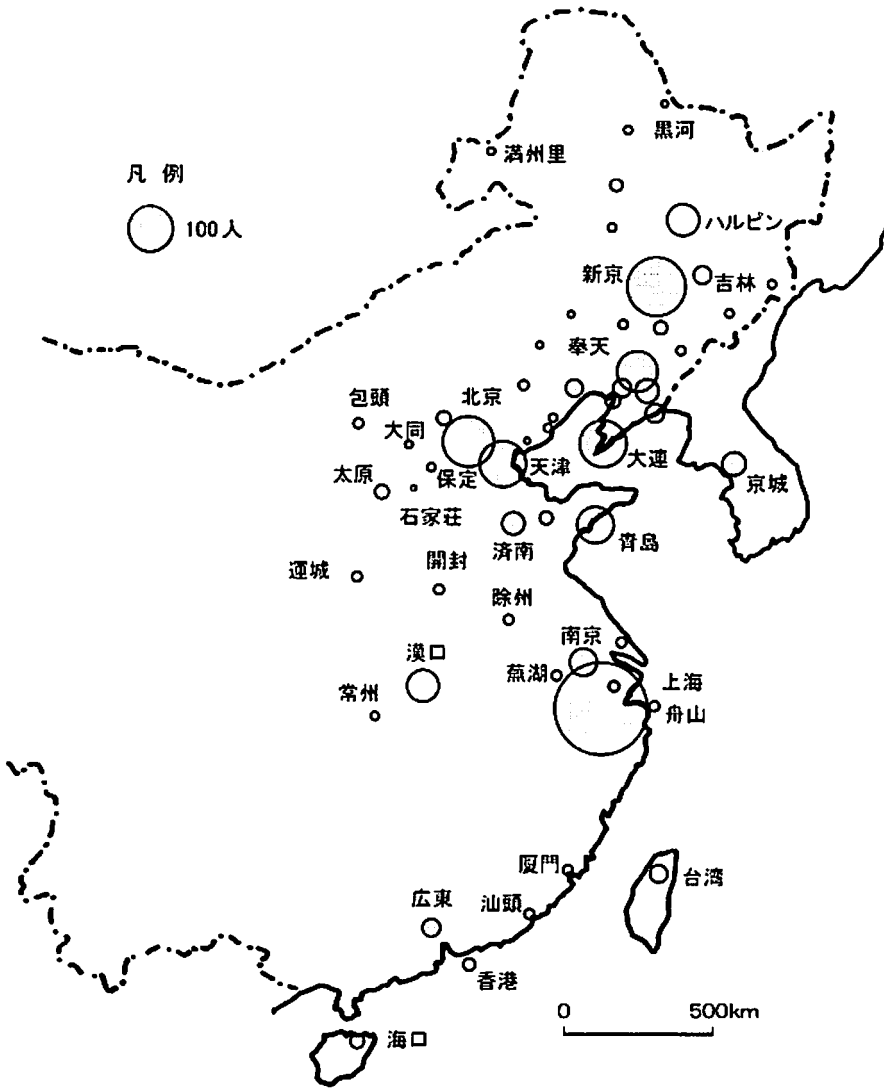
それによると商社や貿易企業、貿易業の就業が最も多く、次いで満鉄など輸送業、金融や鉱業関係、などが多い。書院生の指向性が明確にみられ、書院の設立目的が達成されているといえる。

その他ではまず大使館や領事館で、中国各地の日本領事館には書院生がほとんど進出するほどであった。また新聞など報道部門への進出もみられ、製造業へも進出している。

コラム18は一九三七年時点における書院卒業生の地域別就業職種を紹介している。

それによると、地域は中国本土、満州、日本、外国の四地域に分けられ、この四地域単位でみると日本での就職が最も多いが、次いで満州となっていて、中国よりも多い。ただし、中国と満州を加えるとその数は日本を上回る。職種では商工業関係が最も多く、やはり書院の特徴があらわれている。また中国内で日本官吏も多く、その多くは領事館員である。新聞や通信、教育関係に多いのも特色である。満州では官吏が商工業に次いで目立つが、これは前述したように満州国の成立によるもので、満州国成立以降急増した部分である。

ところで前掲二五表にみられたように、中国で就職する筈の書院生の中には日中戦争が始まると兵役の召集で軍隊



第３図

東亜同文書院生卒業後の中国での就業地（1941現在．１期から37期まで）
（卒業生名簿の判明分より作成）

第25表　中国での就業職種

内容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	合計
商社、貿易	3	3	1	10	7	3	2	2	31
満鉄	3	8	2	9					22
金融	5	3	3	2	2				15
鉱業、石油			2	3	1		1		7
鉄道、交通	2			2	2				6
海運				2	1	1			4
教員	2				1	1			4
新聞社、放送	2					1			3
会社			2	1	2		1		6
大使館、領事館	1			1	2	1			5
家電・メーカー					3				3
造船、製鉄				2					2
紡績	1	1							2
民会組織			1					2	3
政治運動				2					2
兵役、軍務など		1	3	3	5	9	18	11	50
その他	2	1			1		1		5
不明	3		1	10	8	6	7		35
合計	24	17	15	47	35	22	30	15	205

（1995年アンケートより作成）

生活を中国で送らざるをえなかったケースが多い。そのような書院生は兵役の中で中国国内の各地へ送り込まれ、「大旅行」とは全く違う環境下で中国と向いあうことになった。中国語が出来ることで前線で中国人と接するケースもあったが色々な仕事に従事し、「歩兵。陣地の構築（穴掘り）、入隊した当初は銃も支給されず、帯剣の鞘も竹製で物資の無いことを痛感した。常に飢えていた」（四四期、予科）など、聖戦といわれた戦争でその現実に衝撃を受けたとする記述が多い。また「従軍志願時自己抑制があったが、帰還してみて一人でも多くの良民を救うことが出来たのではないかとの思い」を残しつつ従軍下で「中国の将来はどうなるのか、中国の変革に対して日本はどうしたらよ

〈コラム18〉

東亜同文書院卒業生の現況

同文書院卒業生は近来毎年全部就職して尚足らざる状態である。殊に満洲国の成立以来此の方面の事業に従事する者七百八十余名に達し、専ら同国の発展に貢献しつつある。左に同院卒業生の就職別を表示してみよう。（昭和十二年一月現在）

	支那本部	満洲国	日本	外国	合計
日本官吏	六四	四〇	八	三	一八八
満洲国官吏	一	二三〇	一	一	二三〇
支那官吏	五	一	一	一	五
独立企業	五〇	四〇	一五四	一	二四五
銀行業	三四	九一	六四	三	一九二
商工業会社	二四六	二一三	二四五	二四	九二八
教育	三〇	一八	七五	一	一二三
新聞及通信	一五	二四	四五	一	九四
公益事業	二四	一〇	三七	一	七一
雑	五〇	一七	一八七	一	二五五
合計	五二八	七八三	九八八	二一三	二一三二

（一九三七（昭十二）十一月下旬号（「受験旬報」より））

第26表　兵役後の中国への態度

内容	期～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44 予科	44 専門	45 予科	45 専門	合計
変らない	3	8	4	11	6	10	20	10	4	7	7	3	5	98
変った					2	1	5	3	2			1		14
中国の偉大さと強さ					1			1	2	1	1	1	1	8
日中友好を		2			1			1		1	1			6
中国への親近感	1		3	1			1				1			7
日本軍への懐疑		1	2	1		1	2	3		5	1	3	6	25
国民党と共産党の違い					1						1			2
毛沢東政権へ評価								1		1			2	4
その他		1		1				1		1				4
とくになし		2	1	3	4	1							4	15
無記入	15	11	4	14	16	9	4		13	10	5	3	2	106
合計	19	25	14	31	31	22	32	20	21	26	17	11	20	289

（1995年アンケートより作成）

いのか、書院で学んだことをどのように実現していくのか、卒業後就職しても精神は混乱状態でした」（三四期）と学んだ書院精神と現実とのギャップの大きさに悩んだ書院時代生は多い。

第二六表は、そのような兵役で味った中国経験の中で、中国への態度が変ったかどうかについての回答を要約的にまとめたもの。

それによると、その多くは「変らない」とし、中国民衆へのやわらかな眼差しを心に秘めて対応したとする。その一方では「変った」とする回答もあり、その多くが書院大学時代の卒業生に多い。また、「日本軍への懐疑を抱いた」とする回答も目立ち、日中間の友好や中国への思いを抱いた回答も多く、その点に書院出身者の特色がにじみ出たとみることができる。

一九四五年（昭和二〇年）の敗戦とともに書院の卒業生も順次日本へ帰還した。持ち物は限られ、無一文となって引き揚げたケースが多く、戦後の混乱期の日本での再出発はきわめて至難であった。いわば多くの書院生にとって第二の人生としての再出発であり、その点は内地に就職していた書院出身者にとっても似た状況はあった。

そんな中、戦後の経済成長期を迎え、多くの書院生は第一線に立って仕事をこなし、その高い能力が「幻の東亜同文書院」という言葉でささやかれたりした。

再出発した書院卒業生の戦後の就業業種を示したのが第二七表である。職種はかなり幅広く、貿易・商社系や製造業系、金融系などが多いのは当然として、教員や報道系がかなり多いのが目を引く。ジャーナリズムで活躍した卒業

第27表　戦後の就業業種

内容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44 予科	44 専門	45 予科	45 専門	46 予科	46 専門	合計
商社	3	1	4	10	5	6	6	9	6	4	4		4	3	1	66
貿易、造船	1	3	1	9	5	2	1	3	2	3	2	3	5	4	1	45
出版・印刷				2	3	5	6	4	2	7	2	2	4		1	38
教員	4			3	2	1	7	1	1	3	1	3	9	2	2	39
金融	3	2	2	2	3	2	2	1	2	7	1	4		3		34
国家公務員	3		3	2	1	5	2	3	1	1		2	1			24
公務員	1	2	1	2	1			4		2	1					14
運輸、交通	1	1		1	4				1	1		1				10
流通				2			1			1	1					5
商業、サービス				4	1		2			1				1		9
医師					1			1				1				3
会社	1	1	1		2		1	1	2	5	3		2			19
広告		1				1								1		3
石油、電力						1	1			2						4
税理士	1						1	1							3	6
外国企業	1		1	1									1			4
自営					3		1								1	5
不明	2	1	2	1			2		1	1		1	1		1	13
	2		1	6	4			1	2	1	2	1	1			21
合計	23	12	16	45	35	23	33	29	20	39	17	18	28	14	10	362

（1995年アンケートより作成）

生も多い。上海という国際都市で学び、広い視野と日本を外の世界から見ることの出来る資質がこの分野への進出を可能にしたであろうし、同様の状況は教育界への進出も可能にしたのであろう。大陸と同様、国家公務員や公務員に職を求めた卒業生も目立つ。

最多の業種である貿易、商社系では、長期にわたる日中間の断絶の中で、思い切りその実力を直接的に対中国関係で生かすことはきわめてむつかしかったが、香港や台湾、あるいは東南アジアでの商社活動など第一線で活躍した卒業生は多い。中国での経験が日本の中に沈没することの出来ない気質にもなっていたようにみえる。そのことが日本経済のグローバル化を支える力にもなったといえるだろう。そのさい、同窓の強さで就業機会を斡旋したり、情報交換をするケースも多かったと聞く。日中国交がもう少し早ければ、書院卒業生の出番は対中国でもっと大きくなったに違いない。日中国交がない時代でさえ、少しでも中国とかかわる仕事を求めていた状況がアンケートの個々の回答内容からうかがえるからである。そこにも苦境の中でも頑張る書院生気質が読みとれる。

（二）書院の閉学

敗戦により東亜同文書院大学と同専門部は校舎を交通大学に返還することになり、寄るべき場所もなくなった現地で閉学のやむなきに至った。一方、日本の呉羽校地での継続も母体の東亜同文会の建物のGHQによる接収や近衛文麿会長の自殺により同年の年末には困難になり、そのよう

第28表 「書院の閉学」を知った時の気持

内容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44 予科	44 専門	45 予科	45 専門	合計
残念	4	5	3	12	13	10	13	8	4	10	6	1	10	99
苦しみ、なげいた	2	2	2											6
やむをえぬ	3	4	4	13	3	6	8	5	5	15	15	3	6	90
当然		2		1	2		1	1	4	2		2	2	17
関心ない		1									1		1	3
あきらめ		1		3	1							1	1	7
時代の流れで失なう			2		5	3	1					1		12
感慨無量				2	1									3
歴史や精神に残る					1						1			2
自分のことで精一杯	1							2						3
再開は無理だ					1		1							2
閉校は日中関係によくない	1	1												2
なつかしく思った										1	2	1	1	5
他校編入を考えた								1		1		1	1	4
再開を願った	1	2	1	3	2			2	2	4	2	2		21
愛知大学で継続を願った	2	2		2	3	3	3	2	2					19
その他		1						3	1			3	1	9
無記入	4	6	2	9	2	1	3	6	4	4	1	1	5	48
合計	18	27	14	45	34	23	30	30	22	37	28	16	28	352

（1995年アンケートより作成）

第29表 帰国後の編入学校など（回答分のみ）

内容	期 43	44 予科	44 専門	45 予科	45 専門	46 予科	46 専門	合計
愛知大学	3	3	2	2	12	2	4	28
京都大学	3	10		3				16
東京商大	4	2	2			1		9
神戸高商	1	8	1			1		11
大阪商大		1	1	2	2	4		10
旧制佐賀高校				1	1	3		5
大阪外語			1		1	1		3
東京大学	2	1						3
東京高師					3			3
中央大学				1	2			3
紅陵大（拓殖大）			1			1		2
長崎高商		1			1			2
台湾大学					1		1	2
旧制山形高						2		2
社会人	3	5	1	1				10
東北大学		1						1
九州大学	1							1
慶応大学	1							1
その他	1	1	2	3	4	2	1	14
不明	4	5	3	2	2			16
合計	23	38	14	15	29	17	6	142

（1995年アンケートより作成）

な中、東亜同文書院大学を中心に京城帝大、台湾帝大の学生の受け入れと教職員の受入れのため書院大学最後の本間院長が奔走して豊橋の旧予備士官学校跡に愛知大学を新設することになった（昭和二一年）。その結果、書院教員のほか三〇四名の多くの書院大学と同専門部の学生が愛知大学へ編入学することになり、激動の中、本間院長の機転で日本へ引揚げた書院学生の多くが身の置き所を確保した。

このような書院の閉学は在学中の学生はもちろん、書院の卒業生にも多くのショックを与えたに違いない。その気持をたずねた回答が第二八表である。

それによれば「残念」という気持と「やむをえぬ」という気持が相半ばしている。「やむをえぬ」という気持の中にも残念な思いが塗り込められており、残念さとあきらめとが複雑に交錯した思いになっていたといえる。一方、「再開を願った」思いも少なからずみられるが、上海に存在してこそ書院であるという気持もあることが回答の文面からも読みとれる。

そんな中、「愛知大学で継続してほしい」という書院への思いを愛知大学へ託したいとする願いもみられる。

いずれにせよ、約五〇年前書院の閉学を知った時の書院卒業生と在学生の思いがさまざまな思いを込めてこのような形で表現されていたことを知ることができる。

なお、閉学時、書院大学および同専門部に在籍中の書院学生の帰国後の編入先や身の処し方の回答をまとめると第二九表のようになる。愛知大学以外では商大系、高商系が目立つ。

八、戦後の書院卒業生の中国および中国語との関係

学生時代、さらには卒業後も中国大陸で過したケースの多い書院の卒業生は、どこかで何らかの形で中国とのかかわりを持ってきたのではないかという点を設問し、それに対する一連の回答をまとめたのが第三〇表から第三五表にかけての諸表である。

第三〇表では「戦後の仕事が中国と関係があったか」については、約三分の一が「ある」とし、冷戦状況下でもなお中国関係の仕事を求め従事していたことが知られる。調査時点（一九九五）については、高齢化とリタイアもあってその比率は四分の一に低下する。しかし、「今日でもなお中国とかかわりたい気持」は過半の卒業生が十分に持っており、逆に「全くない」とする卒業生の数は少なく、中国への関心の強さがうかがわれる。

それは第三一表における「中国への関心」のレベルにもっとはっきりあらわれ、約七五パーセントの卒業生が「大いに関心をもっている」。

また、そんな中で「戦後中国へ行った」卒業生は七〇パーセントに達し、中国への関心を中国へ出かけることで実現している。とくに日中国交の後、中国へ自由に出かけることが出来、それが書院卒業生の中国への想いを容易に実現させることになった。その多くは観光をかねて中国へ出かけ、とりわけ上海へはそのほとんどの卒業生が立ち寄っている。

第30表　中国との諸関係（その1）

内容		期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
中国と関係が戦後の仕事は	ある	17	6	12	15	10	12	13	9	9	9	6	11	3	4	136
	ない	23	9	33	21	13	16	19	11	25	8	12	14	12	4	220
	不明	1		2	2	1	3	1	2		2	1	5		3	23
	合計	41	15	47	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	379
中国との関係は現在の仕事の	ある	13	1	5	4	5	11	6	8	12	7	2	9	2	2	87
	ない	13	5	16	6	9	8	13	6	11	8	11	9	3	7	125
	不明	15	9	26	28	10	12	14	8	11	4	6	12	10	2	167
	合計	41	15	47	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	379
かかわりたい気持は今日でも中国と	大変強い	11	4	11	12	12	12	13	6	13	5	4	15	8	4	130
	やや強い	10	6	8	5	4	9	7	7	9	6	4	12	3	1	91
	つう	8	5	19	14	6	6	11	6	9	3	5	2	1	4	99
	やや弱い	2		4	1		1		2	1				1		12
	全くない	6		3	5		2			2	2	3	1	1	1	26
	不明	4		2	1	2	1	2	1		3	3		1	1	21
	合計	41	15	47	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	379

（1995年アンケートより作成）

同表には訪問回数も示したが、一〇回以上出かけた卒業生もかなり多い。とりわけ日中関係の要職に就いたり、合弁企業関係、さらには中国での日本語教師を務めることになった卒業生も多く、そのような卒業生が一〇回以上の訪問をしているケースが多い。

第三二表と第三三表は、現段階における中国語の使用頻度や得意な分野についての回答をまとめたものである。

まず第三二年表の「現在の中国語の使用状況」については、「よく使う」、「時々使う」をあわせると約四〇パーセントの卒業生が中国語を使っていることがわかる。それは各期に共通してみられ、かつて学んだ中国語が仕事や趣味でなお生かされていることがわかる。

第三三表は中国語の得意な分野を「読み」、「書き」、「会話」のそれぞれについてそのレベルに対しての回答をまとめて示したものである。それによると、「なんとか」出来るレベル以上をみると、「読み」では実に八七・五パーセント、「書き」では六五パーセント、「会話」では六八パーセントの卒業生が今日なお中国語を生かす力をもっていることがうかがえ、原点の書院教育の中で大きなウェイトを占めた中国語が十分価値をもち、有効性を発揮していることがわかる。

最後に第三四表は、日本における中国関係のボランティア活動の状況の回答分をまとめて示し

第31表　中国との諸関係（その2）

内容		期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
今日、中国への関心	大いにあり	32	13	32	32	15	25	21	17	24	13	16	23	12	8	283
	少しあり	5	1	9	4	5	3	6	3	5	4	1	4	1	1	52
	ふつう	1	1	5	1	2	3	4	1	4	1	1	1	1		26
	あまりない													1		1
	ない	3			1											4
	不明			1		2		2	1	1	1	1	2		2	13
	合計	41	15	47	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	379
戦後中国へ	行った	23	11	33	25	17	26	25	17	23	11	17	19	12	8	267
	行ってない	17	4	13	13	6	5	7	4	7	8	2	9	3	2	100
	不明	1		1		1		1	1	4			2		1	12
	合計	41	15	47	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	379
戦後中国へ行った人の回数	10回以上	4	2	2	4	5	8	6	4	7	4	2	5	3	1	57
	5回以上	2	2	5	3	4	4	5	4	1	3	5	1	2		41
	3回以上	4	4	7	8	4	8	6	3	4		1		3	2	54
	2回	5	2	11	6	1	2	3	2	8		3	5		2	50
	1回	10	1	4	4	2	4	4	4	3		3	8	2	1	50
	不明	16	4	18	13	8	5	9	5	11	12	5	11	5	5	127
	合計	41	15	47	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	379

（1995年アンケートより作成）

第32表　中国語への親しみ

内容		期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
現在、中国語の使用	よく使う	7	1	3	3	3	4	2	4	8	2	1	5	1	1	45
	時々使う	9	5	13	9	7	8	10	7	8	12	3	6	4	2	103
	あまり使わない	7	6	12	10	3	11	12	4	9	1	8	8	5	3	99
	使わない	18	2	17	14	10	8	8	4	12	3	7	8	5	4	120
	不明		1		2	1		1	3		1		3		1	13
	合計	41	15	45	38	24	31	33	22	37	19	19	30	15	11	379

（1995年アンケートより作成）

第33表　中国語の得意な分野

内容		期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
読み	得意	7	1	8	6	5	6	1	4	5	2	2	5	1	1	54(26.9%)
	まずまず	17	12	17	15	7	13	19	6	12	6	4	7	2	2	129(34.0%)
	なんとか	7	1	9	10	7	7	8	8	11	8	4	11	8	2	101(26.6%)
	不得意	6	1	8	5	2	5	4	3	6	3	9	5	4	5	66(17.4%)
	不明	14		5	2	3		1	1				2		1	29 (7.7%)
	合計	41	15	47	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	379(100.0%)
書き	得意	7		3	3	5	2	1	2	1	3		4			31 (8.2%)
	まずまず	10	7	18	10	3	9	10	1	8	4	3	5	3	2	93(24.5%)
	なんとか	11	6	12	12	6	10	14	10	9	8	4	11	7	2	122(32.2%)
	不得意	8	2	9	7	7	10	7	8	13	3	10	9	5	6	104(27.4%)
	不明	5		5	6	3		1	1	3	1	2	1		1	29 (7.7%)
	合計	41	15	46	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	379(100.0%)
会話	得意	7		5	2	4	2	1	2	4	3		3	1		34 (9.0%)
	まずまず	10	6	14	12	6	10	11	3	9	6	3	3	1	2	96(25.3%)
	なんとか	13	6	12	14	5	12	14	11	10	8	5	7	9	3	129(34.0%)
	不得意	8	3	11	7	5	7	5	5	11	2	11	8	4	5	92(24.2%)
	不明	3		5	3	4		2	1				9		1	28 (7.4%)
	合計	41	15	47	38	24	31	33	22	34	19	19	30	15	11	379(100.0%)

(1995年アンケートより作成)

第34表　日本での中国関係のボランティアの内容

内容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
日中関係組織で活動	3			2	3	1	6	2	3	2	1	1	1			25
中国語教師	2	1	2		1	2	1	3	3		2	2	3		1	23
中国留学生の世話				4	1	3	3	1	1	1	1		1		2	18
残留孤児の世話			1					1			1	1	1			5
翻訳、通訳					2	1		1								4
中国研究	1				1			1		1		3	1	1		9
引揚者の世話		1		2												3
中国人への日本語教育									2		1					3
中国人へのサービス、文通													1		1	2
日中合弁企業							1						1			2
中国関係自費出版		1														1
日中関係クラブ		1														1
台湾研究		1														1
台湾の手伝い							1									1
中国の機関					1											1
日中関係スポーツ											1					1
中国事情の講演											1					1
合計	6	5	3	8	9	7	12	9	9	4	8	7	9	1	4	101

(1995年アンケートより作成)

たものである。

それによれば、全体で約一〇〇人の卒業生がさまざまな中国関係のボランティアにかかわっていることがわかる。回答総数に占める割合は二七パーセントで約四分の一に当たる。すでに卒業生のすべてが高齢化し、最も若い卒業生でも七〇歳を越えている（一九九五年時点）。より高齢の卒業生は八〇歳を越えており、その卒業生の方々がなおこれだけの中国関係のボランティア活動を行っていることは実に驚き、敬意を表することである。ボランティアの内容は日中関係の組織や中国語の教師、中国人留学生の世話などが目立つが、中国研究を続けるケースも目立つ。そのほかのボランティアの仕事も多彩であり、書院卒業生が卒業後も何らかの形で中国にかかわろうとする姿勢がこの表の中でかなりはっきり示されているといえる。そこになお書院教育が脈々と生き継がれ、そのバックボーンに書院精神がどっしりと生き永らえていることを知ることができる。

九、書院から得たもの

最後に書院卒業生の現時点での書院感、人生の中での書院に関係する気持や意識についてみてみよう。

第三五表は「書院から得たもの」についての回答をまとめたものである。

回答内容は「大いにあった」と一括で表現したケースと具体的内容を回答したケースがあり、それらについてはキーワードとしてまとめ整理した。

具体的内容についてみると、大きくは二つのグループに分けられる。まず最も多いのは「中国への理解と親しみ」、「国際感覚と世界的視野」など、中国に対する強い関心と理解であり、中国上海で学んだことが日本を外からも見ることが出来、またコスモポリタン的センスを養成することになったということである。これらは後述するように戦後の日本社会の中で強く自覚したことに違いない。

またもう一つは「書院精神」や「人間形成」、私利を求めない「非出世主義」、「精神哲学、儒教」、「使命感、責任感」などが示すグループであり、人の道、人の生き方の原則にかかわる部分である。

この二つはすでに前述した「書院教育の特色」であらわれていた点である。前者は書院の建学の精神「興学要旨」に沿ったその反映であり、後者は書院の教育方法「立教養義」に沿ったあらわれである。全体として書院教育の目的が明確な形で書院生に受容され今日なお継承されてきたこ

第35表　書院から得たもの

内容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
大いにあった	1	1	3	1	3	2	1	2	5	4	5	2	1	2		33
中国への理解と親しみ	6	2	1	8	8	2	9	5	3	4	2	2	6	2	1	61
国際感覚と世界的視野	1	3	3	9	1	1	1	3	4	4	3	2	4			39
中国語を教育できる	3															3
戦後に生きる力と自信			1	1	1	2	3	2		3						13
書院精神とその誇り			1	1	2		2	4					1	1	2	14
先輩や友人を得た				2	1	3	1	1		1	1		1	1	1	13
精神哲学、儒教	1	1		3												5
人間関係	2	1	1		3		1									8
苦境時の抵抗力							3	1				1			1	6
人間形成				4						1		2				7
大陸的おおらかさ												1		2		3
就職先、仕事		1			2	1	2									6
非出世主義、私利少い				1		1			1	1		1	1	2		8
使命感、責任感							3									3
自立性					1						1					2
協調性				1				1								2
自信				2												2
書院での学業の中断の影響												1	2	1	1	5
その他	4	3	1	1	1	1	1	5	1	1	1	2				22
ない	2		1	1	2	3		1	1	3		1	2	2		19
無記入	4		4	9	10	5		4	5	6	5	6	4	2	4	68
合計	24	12	16	44	35	21	27	29	20	28	18	21	22	15	10	342

（1995年アンケートより作成）

とがわかる。その意味において、学校教育、さらには高等教育のあり方がきわめて大きな力を有していたことを確認することができる。

その他、先輩や後輩、さらには同窓のつながり、その中での人間関係、自信や抵抗力など、書院教育の独自のシステムから生み出された項目が挙げられ、文字通り「書院教育」が多くの書院生に受容され、今日なおこのような形で評価されていることがわかる。

なお、「その他」の中には色々な個別の観点の評価も含まれ、少数だが以上のようなかなり明確な書院教育に適応出来なかった回答もある。

ところで、以上のような諸点は他大学出身者と交わる社会の中での自己特性の評価によっても裏付けられるように思われる。

第三六表はそのような観点から、「他大学出身者と比較した書院生の特徴」についての回答をキーワードとしてまとめ、示したものである。

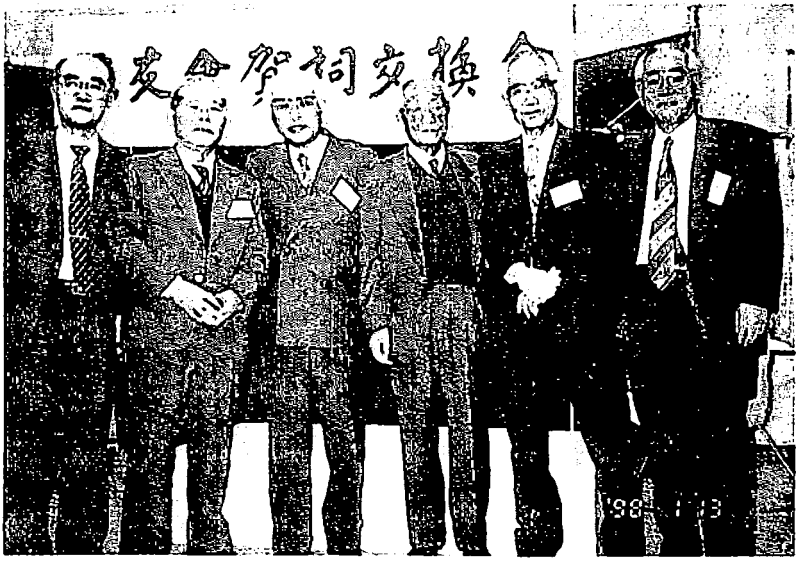
表に示されるように、この設問に対してはより多くの回答が示され、それぞれ思うところがあったものと思われる。

それによれば、前掲第三五表にみられたように、書院教育の二つの側面、つまり一つ目は日中提携にかかわる中国への理解と親しみや国際性、そして二つ目は儒教的原理に基づく人道主義とがここにもあらわれており、その二点は書院教育の中で育った書院卒業生の大きな特徴として十分に自己評価してい

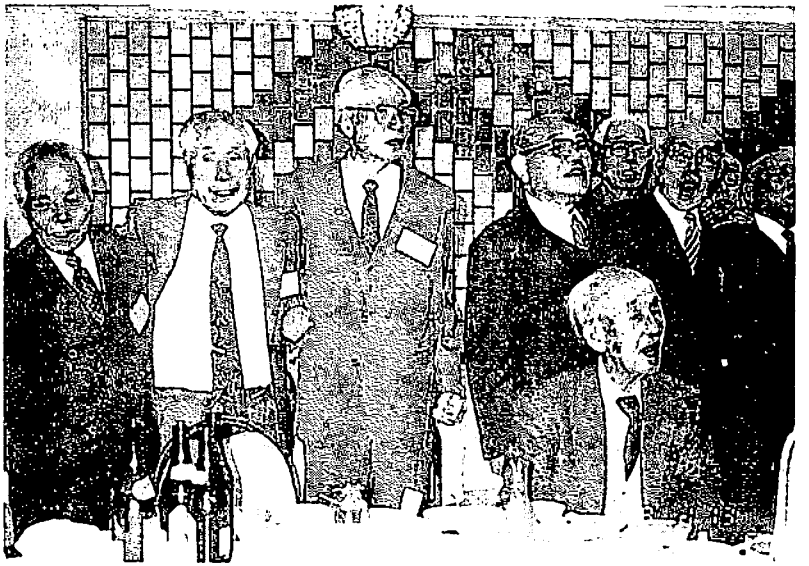
第36表　他大学出身者と比較した書院生の特徴

内容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44 予科	44 専門	45 予科	45 専門	46 予科	46 専門	合計
愛校心と団結力	5	2	1	4	7	3	7	10	4	6	10	3	4	3	1	70
視野が広い	1		1	2	3	2	5	1	3	2	1	5	3	2	2	33
中国への理解と愛着	5			3	6	3	6	2	2	2		1				30
国際的なセンス	1			1				2		1	2	1				8
人間的でスマートでなく、のんびり	1	3		7	4	2	1	1		1	1	1	1	3	1	27
誠実、人情、礼儀正しい	1		1	4	1	2	1	3	1	3	1					18
積極性、使命感、個性的			1			1	4	4	3	2	1	2	2	1		21
立身出世と私利を望まない	1	1		2	1	1	1	3		2			3			15
気骨と信念	1				2	2	2	2					2	1		12
判断力と優秀さ	1	1			1	1		2	1	1						8
林の下の力持ちと社会的貢献			1			1	1	1								4
豪放さと飲酒			2		1		1		2	1				1		8
学んだ科目が幅狭い	1				2			1		3						7
自我が強い				3										1		4
外国人への慣れ		1				1	1									3
その他	1	1	4	1	3				2	1	1		1			15
な い		1		3	4			1		3		3	1	3		18
無記入	8	2	2	16	5	4	3	3	3	5	2	5	2	4	1	65
合計	27	11	13	46	40	23	33	36	21	33	19	21	19	19	5	366

（1995年アンケートより作成）



写真C　毎年同窓生が集う新年賀詞交換会（1998. 1）



写真D　新年の賀詞交換会での「大旅行の歌」の大合唱。(1998. 1)

ることがわかる。

そして、それ以上にここで示されているのが前二者とも関係するが、「愛校心と団結力」でこれが他校出身者に比べた場合の最も強くあらわれた自己評価である。一般人との比較でなく、他校との比較という設問がこのような点をより一層強く引き出したものと思われる。

この点はすでにくりかえし回答の中からも示されたように、上海という異国での同じ釜の飯を食べる全寮制度のもと、上級生と下級生のペアで同室で生活、また、「大旅行」にみられる長期間の現地での苦楽を共にする生活など、異国の中に置かれた書院での生活の中で強いアイデンティティが基本的に形成され、それが卒業後の中国社会の中で生きていく過程でも相互扶助や協力体制を組むことでのアイデンティティにつながった。それはさらに戦後の開学という精神的支えの消失の中で、中国ではなく大半の卒業生が新たに未知の日本での再出発を図らねばならない厳しい状況下で、さらにこのアイデンティティが強化され、それ自体が精神的な支柱になってきたといえる。それは俗にいう偏狭な学閥とは異なり、書院をこよなく愛し、それゆえに書院卒業生をこよなく愛する「書院共同体」というのが妥当かもしれない。それはまた他校出身者には理解できないレベルにあり、そこに書院自体が有したユニークネスが発揮されているとみてよいだろう。

このようないわば「書院共同体」は具体的には書院卒業生の中でも同輩同士はもちろん、先輩と後輩との強いつながりに支えられている。

そこでそのような強いアイデンティティの中で、卒業生

相互はどのような評価や意識をもっているのであろうか。第三七表はその点についての回答をキーワードとしてまとめ、示したものである。設問は「先輩、同輩、後輩の間の特徴」に関する内容について尋ねている。

同表によればかなり多様で多面的な回答が示されている。それはそれぞれの立場での同窓生とのつきあいの中から生まれてきた表現によるためであろう。

全体としては相互に強い連帯感と信頼があり、そのような中で相互にそれぞれの個性と力を尊敬し評価しあっている状況がうかがわれる。気質については戦前、戦中、戦後の卒業生の間に違いがあるという指摘もみられる。戦時中以降は書院での教育機会が十分受けられなかったことの影響であろう。

以上のように書院は見事な教育システムを確立し、その中で書院生は十分にその教育を受け、その教育システムに十分応じた形で卒業後各方面で活躍し、戦後日本のとりわけ高度経済成長期に経済界や教育界、官界、ジャーナリズムなどの発展を支えてきた。そのような書院生の活躍はその出身が上海の東亜同文書院であったと知られ、前述したようにどこか神秘性のある「幻の名門校」というむしろ敬称が付されてささやかれた。

と同時に戦後の東西冷戦の中、戦前、戦時に中国の上海にあったことで書院はスパイ学校ではなかったかという流言もみられ、中には植民地経営のための人材養成学校だと記されたりすることもあった。この点は当時の軍部との関係も含め、戦後も今日も関心が持たれている部分である。しかし、そのため、書院卒業生の中には出身校を人前で話

第37表　先輩・同輩・後輩の間の特徴は

内容	期～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44 予科	44 専門	45 予科	45 専門	46 予科	46 専門	合計
親しく強いつながり	1	4	1	3	4	4	7	9	3	5	6	2	4	2	1	56
変らぬ伝統精神と誇り					1	1	1	2	1	1	1	2	1			11
後輩のめんどみがよい			3		1		2	1	1	2		3	3	2		18
みな快男児、気骨あり				2	1	1		2	2	3	1		1			13
みな進取の気性				2			2	1	1	1				1		8
誠実で信義厚い		1	1		1	2		3		1				1	2	12
広い視野		1		1	2	1	1			1		1				8
大らか、自由、のんびり		1				1	2	1		1			1	1		8
中国への理解者	1	2		6		1	1		2		1	1	2	2		19
日中間の橋渡し	1	2		2									1			6
国際派	1			1			1		1			1				5
個性派								1	1	2	1	1				6
戦前、戦中、戦後で分かれる					1	1	1	1	1							5
30期までとそれ以降で分かれる				1												1
先輩ほど書院生らしい			1			2	2		1				1			7
先輩への尊敬				2			1									3
一概にいえない	1										2	1		1		5
とくにない、わからない	2	2	2	6	3	3		2	1	1	2		1	1	1	27
その他	2			1	1	1	5	3			2		1	1	1	18
合計	9	13	8	27	15	18	26	26	15	18	16	12	16	12	5	236

（1995年アンケートより作成）

さなくなったり、中国での話をきけたりした時期さえあったという。

そこでこの点に関しても書院卒業生に尋ねることにした。当事者の書院生自身がこのような風評や流言をどう受け止めたかという点である。その回答を第三八表に示した。

回答者数はさらにふえ、無記名者はかなり少ない。それだけ書院生もこの風評や流言について強い関心を持っているといってよいだろう。

その内容は全体の約八割が「そのような見方はありえない」とする最も多い回答に近い内容である。それらの各回答表現には強い憤りが込められており、そのような風評や流言に対して強く否定している点で共通する。これが書院で純粋に学び生活した書院生の大方の見方だといえる。

たしかに、日中戦争が始まると一九三七年秋には上海陸海軍の要請を受け、三四期生が約半年間の通訳従軍をしている。しかし、これについても第二次上海事変の中、長崎仮校舎へ移らざるをえなかった書院生の中国に足をつけていたい気持と、当時の戦況の中で居留民団等からの書院への圧力が背景にあったこと、しかし、教授会は軍部からの要請に即応しなかったとされる。

また、内地の大学と同様、戦局悪化の中、一九四三年になると徴兵猶予の撤廃、勤労動員、繰り上げ卒業と書院も順次戦時体制に組み込まれていった。しかし、これら一連の動きは書院だけのことではなく、内地の大学と変わらない動きであった。したがって、この戦時下の動きだけを取り上げて書院を特別にスパイ学校視するのは早計であろ

第38表　東亜同文書院へのスパイ視の見方について

内容	期～30	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
そんな見方はありえない	10	2	3	5	2	3	2	4	3	5	3	3	5	3		53
とんでもない、バカげている	2	1	2	10	3	4	2	8	2	5	1	1				41
心外だ、くやしい			2	7	3		3		2	3	1			1	1	23
そのような事実はない			1		1	2	1	1	1					1		8
誤解だ	3	1	1	6	8	4	5	4	6	9		3	6	2	1	59
偏見だ	2	1		1	1	1	1	3			2	2	2			16
ねつ造だ	1	1		1		1				1	1			1		7
ひがみ、しっと	1					1	2					1				5
知識のない人の考え			2	3	4		1	1	1			1				13
無視、一笑に付す		1		5	1		2	3	1	1	1	3			1	19
軍に利用されたか								2			2	1				5
旅行報告書が利用されたか					3	1	2						1			7
当然だ	1	1														2
中国側からみればやむをえぬかも		2	1		3	3	3	2	2	3	3	2	3	3	2	32
結果として利用されたかも								3			1	1	1			6
その他の意見		1			1		1					1	2	1		7
わからない			2			1				1			1	1	1	7
無記	3		1	6	3	3	1		2	2	1	2	2	3	3	32
合計	23	11	15	44	33	23	26	31	20	30	16	21	23	16	9	342

（1995年アンケートより作成）

う。実際、内地の学校では一般化した軍事訓練の授業は、書院では最後のぎりぎりの時点まで設けられず、今回の回答の中で、書院に軍事訓練がないから書院へ進学したとするケースさえみられた。

回答の中には、自らが行った「大旅行」の調査報告書が軍部に利用されたかも知れない」と自戒的な回答もあり、「中国側からみればやむをえないかも知れない」とする回答が約一割ほどある。前者については、「大旅行」調査報告書に軍部が関心をもった可能性はあるにせよ、軍部の意向で調査テーマやコースが直接的に決められたことがないのは前述の「大旅行」に関する回答でも明らかである。後者については見方の問題もあるといえる。堂々たる学術的地域調査も見方を変えればスパイ活動になりうるからである。少くとも満州事変以前までは中国側からのビザが出されており、堂々たる公然たる「大旅行」であったといってよい。それが時局の変化の中で、ビザが出されなくなったのに「大旅行」を実施した分を急にスパイ活動とは言いにくい。

いずれにせよ、当初の東亜同文会としての統合時には多少の紆余曲折があったとはいえ、書院開設時にはその開設目標は日中間の連携として明確化されている。その目標下で、純粋な目的と教育方法の中で発足し発展した書院が、日中戦争の激化と日本側の戦局の悪化の中で、書院も最後の段階で否応なしに戦局の中へ巻き込まれるに至ったのは事実である。そのことと従前から継承されてきた「大旅行」とが連想され、「スパイ学校」視する風評が立ったということであろう。

書院卒業生の回答内容は、この風評や書院の性格をめぐる議論に対する具体的な回答として十分意味があるといえる。

一〇、おわりに―人生の満足度と書院―

書院は上海に開学して本年（二〇〇一年）に一〇〇年目を迎える。最後の卒業生の齢は七〇歳の半ばになる。活躍されている方もおられるが、多くの卒業生は最も活躍した人生のピークを過ぎ余生を楽しむ年齢になっている。

そこで最後にそれぞれの人生をふりかえっていただき、人生の満足度について自己評価をしていただいた。その回答が第三九表の上半分の部分である。

この設問にも多くの方が回答していただいた。それによると、「まずまず満足」とする回答が全体の過半を占め、それに「大いに満足」の回答を加えると三分の二の回答者がほぼ満足した人生だったとしている。若干「不満足」だったとする回答者もみられるが、大勢としては「満足」との回答に正直なところこのアンケートを実施した筆者はホッとしている。書院卒業生は戦前から戦後の激動期の中、それも中国での学生生活に加え大半の卒業生が中国や満州で生活され、戦後の厳しい環境に遭遇されて、多くの苦労を経験されたからである。

それだけに、この多くの「満足感」は、激動の時代の中で、思い切り活動し生きてきたことの証であろうし、多くの書院生が入学時に描いた大陸での雄飛という進取に富んだ気性の夢が、その後の人生の中でも大いに芽吹き力を発揮できたということであろう。

それでは、その「満足感」の中に、どの程度書院とのか

第39表　人生をふりかえって満足度は

内容		期～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44		45		46		合計
										予科	専門	予科	専門	予科	専門	
人生への満足度	大いに満足	6	2	3	5	3	5	9	4	3	1	3	5	2	1	52(13.7%)
	まずまず満足	24	5	29	19	10	20	15	10	23	7	12	17	6	6	203(53.6%)
	ふつう	3	4	4	5	6	3	7	3	8	8		3	7	1	61(16.1%)
	少し不満足		1		5	1		1	1	1	1				1	12 (3.2%)
	大いな不満足	2		2	1	1	2			1	1	2			1	13 (3.4%)
	不明	6	3	9	3	3	1	3	4	1	1	2	5	1	1	43(11.3%)
	合計	41	15	47	35	24	31	33	22	37	19	19	30	15	11	379(100.0%)
書院卒業生であることとの関係人生の満足度と	大いに関係	23	7	18	15	10	21	18	6	7	1	7	9	5	4	151(39.8%)
	やや関係	12	3	18	10	4	8	7	8	18	6	6	10	2	1	113(29.8%)
	ふつう	1	1		3	5	1	5	1	4	6		3	3		33 (8.7%)
	あまり関係ない			4	4				2	6	4	2	3	4	2	31 (8.2%)
	全く関係ない				1	1						1		1	3	7 (1.8%)
	不明	5	4	7	2	4	1	3	5	2	2	3	5		1	44(11.6%)
	合計	41	15	47	35	24	31	33	22	37	19	19	30	15	11	379(100.0%)

（1995年アンケートより作成）

かわりがあるのであろうか。同表の下半分はそれに対する回答をまとめたものである。

それによると、「書院と大いに関係がある」との回答が実に四〇パーセントを占め、それに「書院とやや関係がある」を加えると七〇パーセントが「関係ある」と自己評価している。それに対して「書院とは全く関係がない」はわずか数パーセント、それに「書院とはあまり関係ない」を加えても一〇パーセントを占めるにすぎない。

人生の満足を「書院との関係がある」とする回答は全期にわたって広がっており、年次には無関係である。その内容には書院での教育や書院の同窓の中での相互協力など色々な側面があったに違いない。

いずれにせよ、人生での「まずまず」以上の満足度は、卒業生の心の中で書院の存在がきわめて大きな役割を果したことは間違いない。その点で、上海での書院キャンパスは姿を消したが、書院精神はこの一世紀の間書院卒業生の中に脈々と継承され、今後も多面的に生きていくことになるだろう。

あらためて、すぐれた書院教育の成果と、それにこたえた書院卒業生の力量に敬意を表したい。

〔注〕

(1) (a)藤田佳久（一九九〇）『蘭州紀要』に寄せて―東亜同文書院学生の中国調査旅行プランへの原点と漢口楽善堂―」、愛知大学国際問題研究所紀要、第九一号。なお、本論文は、(b)藤田佳久（二〇〇〇）「東亜同文書院・中国大調査旅行の研究」、大明堂刊に所収。

(2) 日清貿易研究所（一八九二）『清国通商綜覧（日清貿易必携）』、全三巻、日清貿易研究所刊。

(3) 東亜同文会（一九〇七）『支那経済全書』、全一二巻、丸善刊。

(4) 藤田佳久（一九九二）「波多野養作の中国・西域調査旅行について―東亜同文書院の中国調査旅行実施の契機となった踏査旅行記録から―」、愛知大学国際問題研究所紀要、第九四号。これも（1）(b)に収録。

(5) 藤田佳久（一九八九）「東亜同文書院学生の中国調査旅行コースについて」、愛知大学国際問題研究所紀要、第九〇号。（1）(b)に収録。

(6) 東亜同文会（一九一七～一九二〇）『支那省別全誌』、全一八巻、東亜同文会。

(7) 支那省別全誌刊行会（一九四一～一九四六）『新修支那省別全誌』、第一～九巻、東亜同文会刊。

(8) 愛知大学東亜同文書院記念センター（一九九二）『東亜同文書院大学と愛知大学』、第一輯、六甲出版刊。

(9) 馬場鍬太郎（一九二八）「上海の人口」、支那研究、第一八号。

(10) 大学史編纂委員会（一九八二）『東亜同文書院大学史　創立八十周年記念誌―』、滬友会、八八―八九ページ。

(11) 前掲（4）。

(12) (a)藤田佳久編著（一九九四）『中国との出会い―東亜同文書院・中国調査旅行記録、第一巻』、大明堂。
(b)藤田佳久編著（一九九五）『中国を歩く―東亜同文書院・中国調査旅行記録、第二巻』、大明堂。
(c)藤田佳久編著（一九九八）『中国を越えて―東亜同文書院・中国調査旅行記録、第三巻』、大明堂。

(13) 前掲（7）。

〔付記〕

最後に付録的ではあるが、書院卒業生の方々が挙げていただいた書院で学んだ時代の「印象に残る教師達」を第四〇表として一覧させていただく。表中の数字は教師の名を記入した回答数を示す。教師の就任時期もあるため、教師の間に差があるが、ランキングではなく、「印象に残る」教師ということでご理解いただきたい。ただ、書院教育の中でどの教師が印象深かったかという点は、その教育が書院生に何らかの形で影響を与えたという点からみれば興味深いものがある。

第40表　印象に残る教師たち

内容	期～28	～33	34	35 36	37 38 39	40	41	42	43	44 予科	44 専門	45 予科	45 専門	46 予科	46 専門	合計
根津院長	1															1
真島次郎	1															1
山田岳陽	4	6	8	11												29
大谷孝太郎	2	1														3
大村欣一	1															1
山田謙吉	3	4				1	1	3	1							13
馬場鍬太郎	2	2			1											5
小竹文夫	1	2	1	2	5	2	2						4	1	1	21
鈴木択郎三	2	6	4	9	6	4	6	4	4	5	4		3		5	62
清水薫	2															2
林哲夫	1	1														2
徳積文夫	1		1	3												5
山崎伊太郎	1	3	1				2									7
和田重次郎	1															1
中国人教師	1	1		2	2	1	1	1	4	1	1				1	16
大内院長		4		4	2	1										11
坂本一郎	1	2		7	3	1	2	4	1	2	10		12	3	2	50
久重福三郎	2				2	2				1						7
影山巍	1				1											2
熊野正平		3		3	3	1	3	4								17
野崎駿平		3		4	3	2		2								14
福田勝蔵	1				1											2
桑島信一	1															1
小田勝太郎	1															1
久保田正三	1			1			2									4
桜川影雄				3	1	3				1				1		9
戸田義郎				1	3	2										6
朱牟田夏雄				1	1											2
服部新一					1											1
春宮千鉄					1											1
小岩井浄					2	5	7	3	1	7	3	12	13	1	1	55
矢田七太郎					1	1										2
口田康信					2	2	4	4								12
神内豊吉					1											1
中内二郎						1										1
若江得行						2	1	1	1	3						8
高垣寅次郎						1	5	5								11
内山正夫						1	1		1	1	1	2				7
本間喜一						4	2			1	1	1	4		2	15
手塚泰雄						1	1									2
斉伯守							1	2								3
道上伯							1	1				2				4
太田英一							1	1								2
北野大吉							1	4								5
木田弥三旺							1		1		1		1			4
岩尾正利									1							1
山口左熊									2	1	1					4
三好四郎造									1							1
大木隆吉									3							3
陣内豊司										3		1				4
尾坂徳一										1		1				2
津之地直男												1				1
神谷龍広														4		4
堀江義														1		1
合計	32	38	15	51	42	38	45	39	21	27	22	20	37	11	12	450

（1995年アンケートより作成）

あとがき

今回、ここに示した東亜同文書院卒業生に対するアンケート結果のレポートは、筆者が二〇年近くにわたってすすめてきた東亜同文書院に関する研究の一環である。当初、見向きもされなかった研究が、今日少なからず脚光を浴びるようになったことを思うと隔世の感がある。その最大の背景には、ベルリンの壁の崩壊による東西冷戦体制の崩壊とそれに連動したイデオロギーの厚い壁の崩壊がある。中国については、讃美されていた文革像の現実が浮かび上がり、経済の改革開放政策が人々の意識を変えた。

そんな中で、厚い壁の中に閉じ込められてきた書院にも光がようやく当たり始め、それまでさわろうともしなかった研究者もその存在に新鮮さを感じるようになった。しかも、文革時代とその余韻の残る時代、書院を帝国主義侵略の先兵として一蹴していた中国さえ、近年研究者がその成果物に熱い目を注ぎ始め、書院にまで関心を持とうとしている。書院の後継的存在である愛知大学もそのシフトを変えたのはまだ新しい。書院をめぐる座標軸は今や大きく転換しつつあるというのが正直な見方である。

それだけに従来は書院の実体は熟知されず、流言や風評が幅をきかせやすい状況があった。また、書院研究を歴史的史資料から改め、記録されたそれら史資料だけを正当とみなす研究もある。しかし、それら史資料がどれほどの実体を説明できるかについての確証はない。

従来の書院をめぐる外側の史資料による研究を認めながらも、今回は内側の書院生そのものに焦点をあて、生きた証人として経験的事実を語っていただいた。さまざまな史資料や制度の具体化は、その影響を受けた書院生そのものに直接投影されてきたはずだからである。もちろん、錯覚や時代性も考慮されなくてはならないが、五〇年以上の経過とその後の変革の時代を経験された書院生の言葉は十分信憑性があり説得性がある。このような形でのアンケートによる方法とはいえ、従来、書院生自体への調査は行なわれていない。その点で、今回のこの報告が書院の内側からの生の姿を伝えるものとして重要な意味をもつものと確信している。

今後の書院の再評価を含め、この報告が書院研究の一助になれば幸いである。

ところで、今回のこのアンケート調査には四〇〇人近くの書院卒業生にご協力をいただいた。九〇近い設問があったこともあろう、回収率は三割に満たなかったが、ご高齢で他の方に代筆していただいて回答をお寄せいただいた方もあったほどである。また、各項目に丁寧にお答えいただいた上に、さらに多くの意見やお考えを御教示いただいた方々も多かった。ありがたく思っている。

思わぬ多くの回答内容を前に、どのようにまとめたらよいか思案する時期もあった。早く整理してまとめたい意欲は十分あったが、同時に書院研究の動向も見極めておきたい気持もあった。本年、書院開学一〇〇周年の年にあたり、この機会にこのような形でまとめられるチャンスが出来たのは幸いである。すでにアンケートの整理は数年前に出来上っていたが、今回、回答内容をキーワードにまとめ

る方法で整理した。それ以上の操作はせず、資料的価値を失わぬように表現したつもりである。

多くの回答を多くの情報とともにいただきながら、このようなレベルでしかまとめられなかったことに残念な気持もある。これは紙幅の関係もある。関連していただいた多くの情報は別の形で整理をすすめ、別の機会に第二弾としてまとめられたらと願っている。

ところで、ご回答をいただきながらすでに鬼籍に入られた方々もいる。この結果をお知らせできなかったことへのお詫びと、ご冥福を心より申し上げる。

また、このような形で発表のチャンスを与えていただいた愛知大学東亜同文書院大学記念センターには厚くお礼申し上げ、便宜を図っていただいた旺文社の宮澤静也氏にも厚くお礼申し上げる。また、整理を手助けってくれた妻千鶴子にも感謝を表したい。

さらにあわせて細かな表組みなど短時間に印刷し、書院一〇〇周年記念日の出版に間に合わせていただいた三愛企画にもお礼申し上げる。

二〇〇一年（平成一三年）五月七日

愛知大学文学部（地理学）

藤田佳久

編集部より

『同文書院記念報8号』掲載の「北京国家図書館所蔵東亜同文書院1938—43年書院生夏季旅行調査報告書及び日誌目録」（房建昌　中国社会科学院辺境史地研究センター副所員）は房建昌先生が昨年の夏、来日し、豊橋及び東京で報告されたものの原稿（著者執筆）であります。これに対し藤田照男会員他から意見が寄せられましたので、編集部よりご説明いたします。

一、大旅行報告書、日誌について総括的な報告であり、個々の項目はすべて簡単なものである。例外的に一部詳細な記述のものがありバランスを欠いているとの指摘。

：あくまで房先生の判断によるものと理解しております。

二、項目の一部で、国務院外事弁公室編集印刷の『日本人物辞典』からの引用があり、内容の一部に大きな問題があるとの指摘。

：房先生が引用された意図は不明でありますが、この部分は標題の主旨からいっても、また房先生の執筆ではないことからいっても無くてはならぬものとは考えられません。執筆者にもご連絡の上、次の増刷時に削除することにします。